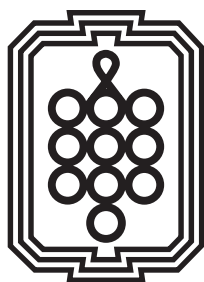


# 福岡女学院看護大学紀要

Bulletin of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

第 9 号 2018 年



福岡女学院看護大学

# 目 次

---

## 【研究報告】

ブックスタート経験が保護者及び児童に与える影響 — 中学3年生時追跡調査（最終） —

Effects of Bookstart on Guardians and Children :

A Follow-up Survey of Third-year Junior High School Students. .... 1

原崎 聖子 篠原 しのぶ 彌永 和美 渡邊 晴美

## 【実践報告】

熊本地震復興支援ボランティア活動および学生ボランティア支援の考察

Reflections on Student Volunteer Activities After the Kumamoto Earthquake

and Teacher Support for Those Activities ..... 11

丸山 智子 酒井 康江 森谷 由美子 松尾 和枝 貞野 宏之 金田 俊郎

## 【資 料】

福岡女学院看護大学看護シミュレーション教育センターの施設利用の実態と課題

The Current Situation and Issue of the Simulation Center for Nursing Education

at Fukuoka Jo Gakuin Nursing University ..... 21

太田 里枝 藤野 ユリ子

福岡女学院看護大学チャペル礼拝統計総覧（2008年度～2017年度）

Overview and statistics of chapel services of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University held in fiscal 2008-2017 ..... 27

貞野 宏之

投稿内規

編集後記

# ブックスタート経験が保護者及び児童に与える影響

## — 中学3年生時追跡調査（最終） —

Effects of Bookstart on Guardians and Children :  
A Follow-up Survey of Third-year Junior High School Students.

原崎 聖子\*  
Seiko Harasaki

篠原 しのぶ\*\*  
Shinobu Shinohara

彌永 和美\*\*\*  
Kazumi Iyonaga

渡邊 晴美\*  
Harumi Watanabe

### 要 旨

〔目的〕本研究は15年前に受けたブックスタートの影響が現存するか否かを調査するものである。

〔方法〕調査は質問紙法で、調査対象者は福岡県小郡市在住の中学3年生児とその保護者であり、ブックスタートを受けた保護者とその子ども749組、ブックスタートを受けていない保護者とその子ども290組である。

〔結果〕調査結果は、受けた群が受けていない群よりも有意に高得点を示していた。その内容は保護者に関して1. 過去の記憶については「絵本の読み聞かせ期間が長かった」「読み聞かせの頻度が多かった」2. 本と一緒に見るという子育てについては「子どもの感性が育つ」「子どもとの絆が深まる」など12項目、3. 子どもに本を読み聞かせることの効果については「絵本を子育てに役立てた」「保護者自身が絵本に興味を持つようになった」など15項目、4. 本に関わる日常生活については「父親が子どもと本を見ている」「本の紹介記事に気をつける」など8項目であった。また、子どもに関しては受けた群の方が「本を沢山読んでもらった」「本を読んでもらうことは好きだった」という値が高かった。しかし、現在の生活や学業面に有意差は見られなかった。

〔考察〕15年前にブックスタートを受けたことは現在の読み聞かせの記憶や、子育て観、家族の状況などに肯定的な結果を示した。このことは、ブックスタートが子育てを支持したことの影響であると考えられると共に、その影響は次世代へと引き継がれる可能性も示唆した。

キーワード：ブックスタート、子育て、日常生活、追跡調査、青年期初期

### Abstract

〔Purpose〕 The research sought to investigate whether the initial impact of the Bookstart program is still evident in the participants after fifteen years.

〔Method〕 The approach was to conduct a self-completion survey. The subjects of the survey were 729 children and their guardians who had been part of the Bookstart program, and 290 children and their guardians who had not, all from Fukuoka Prefecture in Japan. The subjects were asked about the duration and frequency of their reading habits, and about the strength of the bonds developed between the children and their guardians.

〔Findings〕 Analysis of the survey data indicates that those families who had participated in the Bookstart program continue to be engaged in longer and more frequent periods of reading, with participants feeling deeper familial bonds, than those who had not.

〔Conclusion〕 This analysis seems to show that the Bookstart program continues to have a significant positive impact on family relationships in those families who participated.

Key Words : Bookstart, Parenting, Everyday life, Follow-up survey, Early adolescence

\*福岡女学院看護大学 \*\*福岡女学院大学 \*\*\*国際医療福祉大学

## I. 緒言

1992年に英国バーミンガム市で始められたブックスタート運動は、2000年の「子ども読書年」をきっかけとして日本に紹介され18年の歳月が流れた。この活動は「share books with your baby」「抱っこのぬくもりの中でもらう幸せをすべての赤ちゃんのもとへ」をテーマに掲げ、絵本の読み聞かせを通して大人と赤ちゃんが幸せな時を過ごすことができるようにと、0歳児健診で赤ちゃん一人一人の保護者に読み聞かせの実演と絵本を提供するものである(NPOブックスタート(編), 2010)。

現在、日本でブックスタート事業を展開している自治体は、1032市区町村にも及んでいる(Bookstart Japan, 2018, 9/30)。このようにブックスタート事業が広がりを見せた背景には家族構造や労働形態の変化による乳幼児期の子育て支援の必要性が考えられる。

また、支援には保育所等のように家庭外で他者の手により養育を支援するものと、家庭の中での子育てをどのように展開するのかを伝え支えるものとが考えられるが、ブックスタート事業は主に後者であり、食事や排泄など日常生活の基本的な部分から少し離れて「ゆとり」の時間を楽しむ方法を示しているものであると考える。このように親が子育てにゆとりを持つことは、子どもの情緒の安定に繋がり、子どもの安定した状態は家庭・家族の雰囲気にも影響を及ぼすものではないかと考えられる。

そこで、福岡県小郡市は、2003年9月の10ヶ月健診時にブックスタートを開始すると同時にブックスタートを受けたことが、その後の保護者の読み聞かせへの意識、子育て観、日常生活、家族の状況、及び子どもの本に関する意識、日常生活等にどのような影響を及ぼすのかを探るべく、乳児期から児童期、青年期初期に渡るまでの長期に渡る質問紙調査計画を立て開始した。

そしてこれまでに生後10ヶ月、18ヶ月、37ヶ月、就学前は保護者に、小学3年、小学6年では保護者と児童に質問紙調査を行った。その経過を述べると、10ヶ月時調査では、読み聞かせをすると答

えた親は「プレゼントに本をもらいたい」「家にある本を見るようになった」など本に対する意識が高いこと、「子育てによって自分が成長している」と感じていることなどが示された(原崎ら, 2005)。18ヶ月時調査では日常生活の中で全体として「本屋で絵本を買う」「親自身が自分で絵本を読む」など絵本に対する関心が高くなっていた。また、育児では、この時期の子どもの甘えの高さと親のストレスとの正相関が高いことを見出し、読み聞かせによる愛着形成が子育てに対するストレス軽減の一助となる事を示唆した(原崎ら, 2006)。37ヶ月時調査では、ブックスタートの説明を受けた親は、日常生活の中で「父子と一緒に本を見ている」など父親との関係性が高くなっていた(原崎ら, 2007)。就学前時調査ではブックスタートの説明を受けたことで、「兄弟姉妹と一緒に本を見ている」など兄弟姉妹の関係性や「保護者が絵本を見るために本屋へ行く」「保護者が図書館で子どもの本を借りる」など保護者が本を求めて外出することが多くなっていた(原崎ら, 2010)。このように、乳幼児期では、ブックスタートを受けたことにより親の絵本に対する意識が高くなっていることや家庭の中での父親や兄弟姉妹との繋がりが強い方向に向かっている様子を伺うことができた。

また、児童期以降は親だけでなく、子どもに対しても絵本の読み聞かせの記憶、日常生活、好きな科目などを問う質問紙調査を実施した。その結果、小学3年時調査では親がブックスタートを受けた子どもは、「自分で本を読むのが好き」「おうちの手伝いをするのが好き」など本や家庭の意識が好ましい方向にあった(原崎ら, 2012)。また、親の回答では「ブックスタート等で友達ができた」「子育ての悩みを「健康課」等に相談するようになった」などブックスタートの説明を受けたことの有効性を感じており、日常生活の中でも「保護者が図書館の催しに出掛ける」「生涯学習センターや公民館の情報に気を付ける」など公共の施設や情報への関心が高くなっていた(原崎ら, 2013)。

小学6年時調査では2014年、2015年に6年生になった児童の親の回答によりブックスタートを受

けたか受けていないかの2群に分け検討した。その結果、子どもに関する項目の有意差は認められなかったが、ブックスタートを受けた親は「絵本を子育てに役立てた」「保護者が絵本好きになった」「父親が育児に参加するようになった」など読み聞かせの効果をポジティブに捉えていた。また、本を一緒に見るという「子育て」で一番大事な事に「子どもとの絆が深まる」という項目の得点が高く、親と子の絆を大切にすブックスタートのテーマがこの時期まで保持されていると思われた（原崎ら、2016）。

以上のように、乳幼児期、児童期の調査においてブックスタートを受けたことが様々な形で保護者やその子どもに影響を与えていることを見出してきた。

2017年、2018年の2カ年は、本計画の最終学年である中学3年の生徒とその保護者を対象に調査を進め、ブックスタートを受けたことが15年経過後の保護者と青年期初期に至った子どもにどのような影響があるのかについて言及する。

## II. 方法

1. 調査対象 調査時に福岡県小郡市在住の中学3年生及びその保護者 1039組

2. 調査方法 質問紙調査法

3. 調査期間 2017年6月及び2018年の6月に各学校に調査を依頼し、調査終了後、同年7月に各学校にて回収した。調査期間は各年、それぞれ約1ヶ月である。

4. 調査手続 小郡市との話し合いにより調査は回答者数を増し結果の有効性を上げる目的から2カ年に渡り収集を行った。

配布及び回収は福岡県小郡市主導で実施され、各学校宛に学校長、担任宛の依頼文並びに保護者への調査依頼文と質問紙が郵送された。質問紙への回答は、生徒は各クラスで担任主導のもと実施され、保護者は生徒が渡された調査依頼文と質問紙を持ち帰り行われた。調査依頼文には、小郡市教育委員会名で、調査の主旨と同時に、個人を特定するものではなく統計的に処理すること、個人

の資料が外部に公表されることはないことを記載している。また、質問などの問い合わせ連絡先は学校とは直接関係ない、小郡市立図書館となっている。保護者が記入した後、生徒は期日までに学校へ持参し提出した。提出をもって質問紙への同意とみなして回収された。回収された質問紙は個人が特定できないように小郡市図書館にてナンバーを付加されたものを筆者に郵送し、Excel変換し、さらにSPSS用データに変換した。質問紙及び各データは研究代表者が鍵のかかる保管場所に保管している。

5. 質問内容 質問紙は無記名自己記入式で、2011年度より使用している独自作成用紙と同様である。

### 1) 保護者への質問項目

保護者自身の幼児期の絵本との関わりの深さを調査するために「保護者と本との関わり」について3問、ブックスタートの説明を受けた後に実際にどのように読み聞かせを実施したか調査するために「ブックスタート及び読み聞かせ体験」として4問、ブックスタートを受けたか受けていないかによって子育て観や読み聞かせに対する意識の違いを調査するために「本を一緒に見る『子育て』についての考え」12項目、「読み聞かせはどのような効果があったか」について17項目、乳児期にブックスタートを受けたことで現在の生活に差異を及ぼすのかどうかを調査するために「現在の子育て意識について」11項、「現在の家族の状況について」17項目、「現在の子どもの様子について」10項目を調査した。

### 2) 子どもへの質問項目

親がブックスタートを受けたか否かで、子どもに何らかの差異が見られるかどうかを調べるために以下の項目について調査した。読み聞かせの記憶に違いが見られるのかを調査するために「読み聞かせの記憶について」3問、日常の余暇時間に使用するメディア媒体の嗜好の違いを見るために「読書・マンガ・ゲームの嗜好」6問、本との距離感の指標として図書館への接近を調査するために「図書館の利用頻度等」4問、「好きな教科目」1問、家族との関わり方を訪ねた「家庭での様子」



3問等全22問である。

また、単位時間内に想起できることば数の違いがあるか否かを見るために「知っている花」「知っている虫」の記入を各々3分間実施した。

6. 評定尺度 各問にはそれぞれ選択肢を設けて該当する数字を○で囲んで頂いた。また、項目として設定した問は連続評定となっており、それぞれ5段階評定で、5：「非常にそう思う（そうである）」～1：「まったくそう思わない（そうではない）」となっている。尚、生徒に対しては3分間「知っている花・虫の名前数」を想起してもらい正答数を数えて個数とした。

7. 分析方法 SPSS Statistics 23使用。

グループ間の平均値を比較するために「独立したサンプルのt検定」により有意確率、度数、平均値、標準偏差を算出した。また、グループ間の回答比率の偏りを比較するためにカイ二乗検定として「記述統計量；クロス集計表」により有意確率、度数、パーセントを算出した。尚、有意水準は5%で検定を行った。また、検定に際し無回答等の各欠損値については人数から除外した。

文中、ブックスタートを受けた群と受けていない群の分割については、保護者質問紙、質問番号3-問1「ブックスタートをどこの自治体で受けられましたか」の問いに対して、回答1. 小郡市や、2. その他の自治体で受けたと回答した者をブックスタート「受けた」保護者として、3. 受けていないと答えた者をブックスタート「受けていない」保護者として分析した。また、生徒に関しても保護者の解答をもとにして同様に「受けた」群

と「受けていない」群に分けた。

8. 倫理的配慮 本研究は福岡女学院看護大学研究理委員会の承認を得たものである。

研究倫理審査結果通知番号 第17-5号

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 調査対象者概要

調査対象者は福岡県小郡市内5つの中学校の3年生（子ども）及び保護者で、子どもの質問紙回収数 1192、前述の保護者質問番号3-問1による有効回答数 1039、回答率（87.2%）、保護者の質問紙回収数 1191、質問紙番号3-問1による有効回答数 1039、回答率（87.2%）であった。ブックスタートを受けた状況は、小郡市で受けた 575名、その他の自治体で受けた 174名の合計749名、受けていない 290名、となっている。

#### 2. 保護者に対する調査結果

##### 1) 保護者と本との関わり

保護者の幼い頃の絵本体験や現在の読書嗜好についてカイ二乗検定を行ったところ2グループ間有意差は見られなかった（表1, 表2）。また、表3. 現在の「図書館利用頻度」においては受けていない群において利用しないという回答が多かった（ $p < .001$ ）。

##### 2) 子どもへの読み聞かせ経験について

子どもへの読み聞かせの経験についてカイ二乗検定を行ったところ「いつごろまで読み聞かせをしたか」については表4. に示すように両群を比

表 1 幼いころに絵本を読んでもらったか（親）

		よく	ときどき	あまり	ない	覚えていない	合計
ブックスタート	受けた	110 14.7%	218 29.2%	182 24.4%	81 10.8%	156 20.9%	747 100.0%
	受けていない	34 11.8%	90 31.1%	58 20.1%	37 12.8%	70 24.2%	289 100.0%
合計		144 13.9%	308 29.7%	240 23.2%	118 11.4%	226 21.8%	1036 100.0%

$\chi^2=5.00, df=4, p>.10$  n.s.

表 2 読書が好きか（親）

		非常に	まあまあ	あまり	好きではない	合計
ブックスタート	受けた	121 16.2%	418 56.0%	178 23.8%	30 4.0%	747 100.0%
	受けていない	50 17.3%	156 54.0%	68 23.5%	15 5.2%	289 100.0%
合計		171 16.5%	574 55.4%	246 23.7%	45 4.3%	1036 100.0%

$\chi^2=0.970, df=3, p>.10$  n.s.

表 3 図書館の利用（親）

		よく	ときどき	あまり	しない	合計
ブックスタート	受けた	42 5.6%	227 30.3%	301 40.2%	178 23.8%	748 100.0%
	受けていない	27 9.3%	64 22.1%	100 34.6%	98 33.9%	289 100.0%
合計		69 6.7%	291 28.1%	401 38.7%	276 26.6%	1037 100.0%

$\chi^2=19.07, df=3, p<.001$

表 4 いろいろまで読み聞かせをしたか

	1歳頃	2歳頃	3歳頃	4歳頃	5歳頃	小学入学	小学3年	小学6年	現在も	していない	合計	
ブックスタート	受けた	9 1.2%	34 4.6%	95 12.8%	51 6.9%	111 14.9%	304 40.9%	101 13.6%	16 2.2%	2 0.3%	21 2.8%	744 100.0%
	受けていない	6 2.1%	12 4.2%	44 15.4%	20 7.0%	46 16.1%	99 34.6%	33 11.5%	5 1.7%	0 0.0%	21 7.3%	286 100.0%
合計	15 1.5%	46 4.5%	139 13.5%	71 6.9%	157 15.2%	403 39.1%	134 13.0%	21 2.0%	2 0.2%	42 4.1%	1030 100.0%	

$\chi^2=16.42, df=9, p<.10$

表 5 読み聞かせはどの程度くらいしたか

	毎日	週3-4	週1	たまに	ほとんどしなかった	覚えていない	合計	
ブックスタート	受けた	122 16.4%	319 43.0%	106 14.3%	150 20.2%	21 2.8%	24 3.2%	742 100.0%
	受けていない	43 15.0%	92 32.1%	47 16.4%	62 21.6%	20 7.0%	23 8.0%	287 100.0%
合計	165 16.0%	411 39.9%	153 14.9%	212 20.6%	41 4.0%	47 4.6%	1029 100.0%	

$\chi^2=26.51, df=5, p<.001$

表 6 本を一緒に見る子育てで一番大事だと思うこと

	子どもが本好きになる	言葉の発達が早い	子どもとの絆が深まる	保護者がゆったりする	子どもの感性が育つ	子どもの知性が育つ	子どもがおちつく	子への愛情が深まる	子どもが保護者を好きになる	思い出になる	保護者が読書を楽しむ	話しを聞ける子になる	合計	
ブックスタート	受けた	122 17.8%	21 3.1%	165 24.1%	14 2.0%	156 22.8%	13 1.9%	18 2.6%	34 5.0%	10 1.5%	50 7.3%	2 .3%	80 11.7%	685 100.0%
	受けていない	45 17.0%	14 5.3%	53 20.0%	4 1.5%	66 24.9%	5 1.9%	6 2.3%	13 4.9%	2 .8%	18 6.8%	0 0.0%	39 14.7%	265 100.0%
合計	167 17.6%	35 3.7%	218 22.9%	18 1.9%	222 23.4%	18 1.9%	24 2.5%	47 4.9%	12 1.3%	68 7.2%	2 .2%	119 12.5%	950 100.0%	

$\chi^2=7.77, df=11, p>.10, n.s.$

較すると、受けた群の読み聞かせ期間は、小学校、現在までの割合が多く、長い期間にわたって読み聞かせを続けている様子が伺える（ $p < .10$ ）。また、受けていない群では、読み聞かせをしていない割合が多かった。「読み聞かせ頻度」については表5. に示すとおり、受けた群が週3-4回43.0%など読み聞かせ頻度高の割合が高く、受けなかった群は受けた群に比べて「ほとんどしなかった」「覚えていない」の割合が高くなっていった（ $p < .001$ ）。

### 3) 本を一緒に見る「子育て」について

「本を一緒に見る子育てで一番大事だと思うことは何か」という問いに対してカイ二乗検定を行ったところ、表6. に示すように両群に有意差はなく、両群とも「子どもの感性が育つ」「子どもとの絆が深まる」という回答が20%を超えていた。

しかしながら、表6の各選択項目を「本を見る『子育て』としてどのように考えるか」の平均値を両群で  $t$  検定比較したところ、表7. に示すように、12項目全てに有意差がみられ、いずれもブックスタートを受けた群の平均値が高かった（ $p < .001$ ）。このことは、ブックスタートを受けた保護者の方が、子育てに絵本を利用する事は子どもの心身の発達や情緒の安定、保護者と子ども

との関係づくりに意味があると捉えていることが示されていると考える。

### 4) 読み聞かせの効果について

子育てに際して読み聞かせを行うことは、実際にどのような効果があったと考えるかについて、 $t$  検定を行ったところ表8. に示すように15項目で有意差がみられ、いずれもブックスタートを受けた群が高かった（ $p < .05$ ）。このことはブックスタートを受けた群は、絵本を読み聞かせることにより、より保護者が絵本に興味を持つようになった、絵本を購入する・プレゼントするなど日常の中に絵本と関わる場面が増した、父親と一緒に絵本を見たり育児に参加するようになった、子どもとの関係が良くなったなど、家庭内での様々な効果を認めていることを示している。また、一方ではブックスタートを通して保護者に友達ができたなど家庭外の効果も示されていた。

### 5) 保護者の日常生活について

現在の保護者の日常生活について「現在の子育て」「家族の状況」「子どもの様子」について両群による  $t$  検定を行ったところ、まず「現在の子育て」については表9. に示すように、両群の有意差は認められず、両群とも子育てによるストレス項目よりも、子ども保護者双方の成長を感じる項

表 7 本と一緒に見る「子育て」についてどのように考えるか

項目	ブックスタート	n	平均値	標準偏差	t 値	P
子どもが本好きになる	受けた	709	3.894	0.903	3.137	.002
	受けていない	277	3.690	0.966		**
子どもの言葉の発達が早くなる	受けた	708	3.788	0.850	3.476	.001
	受けていない	277	3.570	0.967		**
こどもとのきずなが深まる	受けた	706	3.834	0.838	3.728	.000
	受けていない	277	3.603	0.964		***
保護者がゆったりとした気分になれる	受けた	709	3.463	0.885	3.902	.000
	受けていない	275	3.207	1.009		***
子どもの感性が育つ	受けた	709	4.025	0.753	4.031	.000
	受けていない	276	3.797	0.904		***
子どもの知性が育つ	受けた	709	3.965	0.792	3.571	.000
	受けていない	277	3.755	0.923		***
子どもが落ち着く	受けた	708	3.768	0.839	4.530	.000
	受けていない	277	3.487	0.962		***
保護者の子どもへの愛情が深まる	受けた	706	3.564	0.875	3.754	.000
	受けていない	277	3.321	0.997		***
子どもが保護者を好きになる	受けた	705	3.549	0.902	3.960	.000
	受けていない	275	3.287	0.997		***
絵本や本と一緒に見ることがいつまでも思い出になる	受けた	708	3.804	0.915	4.352	.000
	受けていない	275	3.509	1.044		***
保護者が読書を楽しむ	受けた	708	3.451	0.933	3.814	.000
	受けていない	277	3.191	1.023		***
人の話が聞ける子どもになる	受けた	708	3.751	0.838	3.028	.003
	受けていない	277	3.563	0.971		**

t検定 \*\*\*p<.001, \*\*p<.01

表 8 読み聞かせはどのような効果があったと考えるか

項目	ブックスタート	n	平均値	標準偏差	t 値	P
絵本を子育てに役立てた	受けた	748	3.333	0.976	3.315	.001
	受けていない	285	3.105	1.012		**
家の本を読んで聞かせるようになった	受けた	741	3.447	0.869	3.575	.000
	受けていない	283	3.223	0.966		***
保護者が絵本や本を購入するようになった	受けた	742	3.373	1.037	1.669	.095
	受けていない	286	3.252	1.069		+
図書館に子どもを連れて行くようになった	受けた	746	3.083	1.161	3.559	.000
	受けていない	285	2.789	1.244		***
父親も絵本や本を子どもと一緒に見るようになった	受けた	740	2.519	1.160	3.464	.001
	受けていない	281	2.242	1.088		**
保護者が絵本に興味をもつようになった	受けた	748	3.321	1.012	3.871	.000
	受けていない	286	3.042	1.098		***
プレゼントに絵本や本をとおくようになった	受けた	747	3.151	1.037	2.872	.004
	受けていない	286	2.941	1.102		**
保護者がお話しなど催しに興味をもつようになった	受けた	747	2.629	1.014	3.474	.001
	受けていない	285	2.382	1.037		**
子育ての悩みを「学校」「教育センター」等で相談するようになった	受けた	745	1.917	0.843	2.026	.043
	受けていない	286	1.797	0.863		*
保護者が図書館で子どもの本を借りるようになった	受けた	747	2.914	1.228	2.708	.007
	受けていない	283	2.678	1.299		**
父親が育児に参加するようになった	受けた	743	2.499	1.064	2.898	.004
	受けていない	280	2.282	1.082		**
子どもが他者に絵本を読んで聞かせることがある	受けた	747	2.673	1.109	3.153	.002
	受けていない	283	2.431	1.078		**
保護者が絵本や本を好きになった	受けた	743	3.171	1.039	4.005	.000
	受けていない	286	2.874	1.129		***
子どもとの関係が良くなった	受けた	745	3.196	0.915	4.191	.000
	受けていない	286	2.923	0.988		***
ブックスタートやおはなし会等を通して保護者に友達ができた	受けた	744	1.985	0.883	4.168	.000
	受けていない	274	1.726	0.870		***
出来事や思ったことを子どもが言葉で説明しようとするようになった	受けた	746	2.926	0.923	3.274	.001
	受けていない	282	2.709	1.013		**

t検定 \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, +p<.10

目の平均が高くなっていた。また、「子どもの寝顔をみてかわいいと思う」が4.5点以上を示しており青年期に掛かる中学3年児においても乳幼児期と変わらず子どもの寝顔を愛しいという保護者の様子を表していた。

また、本に関わる「日常の生活」については表9. に示すとおり「父親が子どもと本を見ている」

「本の紹介記事に気をつける」「兄弟姉妹と一緒に本を見ている」「保護者が本屋で本を買う」「保育に関する通信販売、通信教育を利用する」「保護者が本を見るために本屋へ行く」「保護者が本をプレゼントする」「保護者が読書する」などの項目に有意差が見られ (p < .05)、いずれもブックスタートを受けた群の平均値が高く、日常生活の



中でブックスタートを受けた群の方が本との関わり方が強かった。

「子どもの様子」については表9. に示すとおり「小さい子の面倒を見る」「天気の良い日は戸外で遊ぶ」「友だちを家に連れてくる」有意差が

見られ ( $p < .05$ )、いずれもブックスタートを受けた群が高かった。しかし「手伝いをよくしてくれる」はブックスタートを受けていない群が10%水準で高い傾向を示した。

表9 ブックスタートを受けたか否かによる平均値比較 (保護者)

	ブックスタート	n	平均値	標準偏差	t	p
<b>現在の子育てとの関係</b>						
子どもをうまく育てている	受けた	746	2.916	0.822	-0.268	.789 n. s.
	受けていない	290	2.931	0.870		
子どもの寝顔をみてかわいいと思う	受けた	748	4.564	0.663	0.778	.436 n. s.
	受けていない	290	4.528	0.721		
子育てでどうしたらよいか分からなくなる	受けた	748	2.956	0.983	-0.937	.349 n. s.
	受けていない	289	3.021	1.044		
子どもは結構一人で育っていく	受けた	748	2.906	0.909	0.793	.428 n. s.
	受けていない	290	2.855	0.995		
自分一人で子育てをしている圧迫感を感じる	受けた	748	2.100	0.899	-1.462	.144 n. s.
	受けていない	289	2.194	0.985		
子育てによって自分が成長している	受けた	746	3.920	0.931	1.630	.103 n. s.
	受けていない	290	3.814	0.956		
子どもをそだてるために我慢している	受けた	749	2.219	0.739	-1.073	.284 n. s.
	受けていない	290	2.276	0.836		
子どもがいることで生活にゆとりを感じる	受けた	746	3.241	0.993	-0.712	.477 n. s.
	受けていない	289	3.291	1.020		
子育てで毎日ぐたぐたになる	受けた	747	2.285	0.829	0.752	.452 n. s.
	受けていない	290	2.241	0.871		
子どもに感情的に接してしまう	受けた	746	2.883	0.871	0.695	.488 n. s.
	受けていない	290	2.841	0.882		
毎日はりつめた緊張感がある	受けた	749	1.834	0.804	0.751	.453 n. s.
	受けていない	290	1.793	0.775		
<b>本に関わる日常生活</b>						
父親が子どもと本を見ている	受けた	702	2.150	1.090	3.773	.000 ***
	受けていない	268	1.862	0.983		
兄弟姉妹と一緒に本を見ている	受けた	694	2.762	1.113	2.327	.020 *
	受けていない	263	2.574	1.126		
保護者が本屋で本を買う	受けた	703	3.346	1.070	2.398	.017 *
	受けていない	276	3.159	1.152		
知育に関する通信販売や通信教育を利用する	受けた	706	2.416	1.114	2.208	.027 *
	受けていない	275	2.244	1.065		
図書館に子どもを連れていく	受けた	706	2.690	1.157	1.816	.070 +
	受けていない	276	2.540	1.179		
保護者が図書館で子どもの本を借りる	受けた	707	2.639	1.240	1.720	.086 +
	受けていない	276	2.489	1.204		
インターネットで絵本を買う	受けた	705	2.294	1.230	0.647	.518 n. s.
	受けていない	274	2.237	1.213		
保護者が絵本を見るために本屋へ行く	受けた	705	3.485	1.083	2.366	.018 *
	受けていない	275	3.298	1.180		
保護者が本をプレゼントする	受けた	704	3.080	1.144	2.596	.010 *
	受けていない	275	2.865	1.199		
保護者が図書館の催しに出掛ける	受けた	706	1.826	0.930	0.005	.996 n. s.
	受けていない	275	1.825	0.981		
公民館の図書コーナーに子どもを連れて行く	受けた	705	1.899	0.991	-0.288	.773 n. s.
	受けていない	275	1.920	1.057		
本の使い方についての本を読む	受けた	707	1.700	0.833	-0.210	.834 n. s.
	受けていない	275	1.713	0.868		
生涯学習センターや公民館の情報に気を付ける	受けた	707	2.156	1.034	1.217	.224 n. s.
	受けていない	276	2.065	1.077		
本の紹介記事に気を付ける	受けた	705	2.709	1.106	3.570	.000 ***
	受けていない	274	2.423	1.172		
保護者が読書をする	受けた	706	3.109	1.150	2.352	.019 *
	受けていない	276	2.913	1.233		
読んだ本について話し合う	受けた	707	2.632	1.063	1.115	.265 n. s.
	受けていない	276	2.547	1.106		
保護者が子ども向けのテレビやビデオを見せる	受けた	707	2.771	1.054	1.640	.101 n. s.
	受けていない	275	2.647	1.075		

子どもの様子	ブックスタート	n	平均値	標準偏差	t	p
学校での出来事をよく話す	受けた	709	3.537	1.055	0.304	.761
	受けていない	278	3.514	1.097		n. s.
親子でよく会話する	受けた	709	3.790	0.929	-1.525	.128
	受けていない	278	3.892	0.992		n. s.
手伝いをよくしてくれる	受けた	709	2.913	1.049	-1.847	.065
	受けていない	277	3.051	1.069		+
家族で外出する事を好む	受けた	708	3.234	1.029	1.232	.218
	受けていない	278	3.144	1.062		n. s.
親の行動に興味を持っている	受けた	707	3.123	0.930	0.429	.668
	受けていない	278	3.094	1.071		n. s.
弟妹や小さい子どもの面倒を良く見てくれる	受けた	703	3.266	1.097	1.974	.049
	受けていない	273	3.110	1.139		*
天気の良い日は戸外でよく遊ぶ	受けた	705	3.162	1.110	2.366	.018
	受けていない	278	2.975	1.129		*
友達をよく家に連れてくる	受けた	708	2.668	1.027	2.315	.021
	受けていない	278	2.496	1.101		*
いろいろな本をよく読んでいる	受けた	708	3.068	1.126	1.925	.054
	受けていない	278	2.914	1.143		+
よく勉強している	受けた	708	2.855	1.073	0.167	.867
	受けていない	278	2.842	1.106		n. s.

表 10 読み聞かせの記憶及び現在の生活（子ども）

項目	ブックスタート	n	N=749(受けた), N=290(受けていない)				p
			よく	ときどき	あまり	ない	
幼児期に本を読んでもらったか	受けた	748	366 48.9%	207 27.7%	162 21.7%	13 1.7%	<.01
	受けていない	290	109 37.6%	86 29.7%	85 29.3%	10 3.4%	
幼児期に本を読んでもらうのが好きだったか	受けた	735	351 47.8%	255 34.7%	95 12.9%	34 4.6%	<.05
	受けていない	285	107 37.5%	112 39.3%	44 15.4%	22 7.7%	
その日の出来事や友だちのことを親に話すか	受けた	739	289 39.1%	263 35.6%	126 17.1%	61 8.3%	<.05
	受けていない	286	117 40.9%	84 29.4%	68 23.8%	17 5.9%	

各設問についてχ<sup>2</sup>検定

### 3. 子どもに対する調査結果

#### 1) 読み聞かせの記憶について

「幼児期に本を読んでもらったか」「幼児期に本を読んでもらうのが好きだったか」という問について表10. に示すようにカイ二乗検定を行ったところ、「幼児期に本を読んでもらったか」については、ブックスタートを受けた群で「よくあった」と答えた割合が10ポイント以上高かった（ $p < 0.01$ ）。また、「幼児期に本を読んでもらうのが好きだったか」の質問でも、ブックスタートを受けた群の「好きだった」という割合が10ポイント程度高くなっていた（ $p < 0.05$ ）。

ブックスタートを受けた親の読み聞かせ行動は、中学生の記憶の中に良い影響として留まっているといえよう。

#### 2) その他の項目について

「本を読むのが好きか」等「読書・マンガ・ゲー

ムの嗜好」、「学校の図書館で本を借りるか」「地域の図書館で本を借りるか」等「図書館の利用頻度」、「好きな教科目」では有意差は見られなかった。また、「家庭での様子」は表10. に示すとおり「その日の出来事や友達の事を親に話すか」という問ではブックスタートを受けた群は「ときどき話す」、受けていない群は「あまり話さない」の割合が多くなっていた（ $p < 0.05$ ）。「知っている花」「知っている虫」の単位時間内想起数にも有意差は認められなかった。

### IV. 考察

乳児期に受けたブックスタートの影響が15年経過後の青年期初期の中学3年生や保護者に存在しているかということを探ってみた。それによるとブックスタートを受けた保護者は受けていない保

護者に比べて絵本の読み聞かせ期間が長く、読み聞かせの頻度も多かった。また、ブックスタートを受けた保護者は親子で本と一緒に読むことは親子の絆を強め、子どもの感性を育てるなど様々な良い面が期待できると感じていた。さらに、読み聞かせの効果としては保護者が本に興味を持ち本に関わる機会が増える、父親子どもと本を見ているなど、家庭の状態や家族の状況にも好ましい方向にあることからブックスタートを受けたことで保護者の意識や生活に良い影響があったと考えることができた。

また、子どもの比較では10ヶ月時に親がブックスタートを受けた子どもは、中学3年生時でも、幼児期に本を沢山読んでもらった、本を読んでもらうことは好きだったなどの記憶が残っていた。しかし、現在の生活や学業面には影響はなかった。

## V. 結語

ブックスタートは乳幼児期の子育て支援を第一義的な目標としているが、その親子で1つの絵本を読む経験は親子共に記憶として残り、乳幼児期の子育てのみならず、児童期を経て青年期初期の家庭の雰囲気にも影響することが示唆された。ブックスタート事業をきっかけとして、赤ちゃんと一緒に絵本を読み聞かせながらゆったりとした時を過ごすことが、家族の中に絆を形成し、その記憶がまた、次の世代の子育てや親子関係、家族関係の形成に良い方向で寄与できることを願うものである。

謝辞：本研究では、2017年度・2018年度小郡市ブックスタート事業、中学3年生徒及び保護者の質問紙調査データを使用させていただきました。小郡市長をはじめとして各学校関係者および質問紙作成、配布、回収を頂きました小郡市ブックスタート事業関連の皆様にお礼申し上げます。

## VI. 参考文献

原崎聖子, 篠原しのぶ. (2005). 母親の乳幼児養育に関する調査—ブックスタート事業との関わ

りから—. 福岡女学院大学紀要人間関係学部, 6, 59-68

原崎聖子, 篠原しのぶ. (2006). 母親の乳幼児養育に関する調査—ブックスタート事業18ヶ月児を中心に—. 福岡女学院大学紀要人間関係学部, 7, 23-28

原崎聖子, 篠原しのぶ, 安永可奈子. (2007). 母親の乳幼児養育に関する調査—ブックスタート事業36ヶ月児を中心に—. 福岡女学院大学紀要人間関係学部, 8, 73-82

原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美. (2010). 就学前児の家庭における読み聞かせ環境の調査—ブックスタート事業との関係—. 福岡女学院大学紀要人間関係学部, 11, 53-60

原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美, 渡邊晴美. (2013). ブックスタート追跡調査からみる保護者の意識と学童期への影響について—小学校3年生を対象として—. 福岡女学院大学紀要人間関係学部, 14, 15-25

原崎聖子, 篠原しのぶ, 彌永和美, 渡邊晴美. (2016). ブックスタート経験が保護者及び児童に与える影響—小学6年生時追跡調査—. 福岡女学院大学紀要人間関係学部, 17, 61-68

NPOブックスタート (編). (2010). 「赤ちゃんと絵本をひらいたら」—ブックスタートはじまりの10年—. 岩波書店

NPOブックスタート (編). (2014). 「ブックスタートがもたらすもの」に関する研究レポート. NPOブックスタート

NPOブックスタート Bookstart Japan. 2018-09-30. <http://www.bookstart.or.jp/>

# 熊本地震復興支援ボランティア活動および 学生ボランティア支援の考察

Reflections on Student Volunteer Activities After the Kumamoto Earthquake  
and Teacher Support for Those Activities

丸山 智子*	酒井 康江*	森谷 由美子**
Tomoko Maruyama	Yasue Sakai	Yumiko Moriya
松尾 和枝*	貞野 宏之*	金田 俊郎*
Kazue Matsuo	Hiroyuki Sadano	Shnrou Kaneda

## 要 旨

〔目的〕本報告では、2016年12月から2018年3月まで実施した熊本地震復興支援ボランティア活動（1次隊から5次隊）および学生ボランティア支援について振り返り評価を行い、今後の課題を見出すことを目的とする。

〔方法〕2016年12月から2018年3月までの熊本地震復興支援ボランティア活動および学生ボランティア支援について「熊本応援したかった 活動報告書 第1報、第2報」を用いて考察する。

〔結果〕熊本地震復興支援ボランティア活動の活動前では、活動内容の企画立案を行い、受け入れ団体との調整を行った。活動中は、健康測定会とミニ講和や子ども交流などの活動をタイムリーに情報発信していった。活動後は、情報共有を行えるように報告書作成やチャペルでの報告を行った。学生ボランティア支援では、隊員構成として他学年との交流や活動2回参加など学生の主体性を引き出すことが出来るような関りを行った。

〔考察〕熊本地震復興支援ボランティア活動の活動前では、教員が受け入れ団体の調整、学生と現地のニーズのマッチングを行い、コーディネートの役割を果たすことが出来ていた。活動中は、活動が学生の対人スキル向上につながり、他学科学生との協働作業により、学生は視野と人間関係の広がりを持つことが出来た。活動後は、様々な場面での報告を行うことで多くの人に知ってもらう機会を持つことが出来たと考えられる。学生ボランティア支援では、学生は他学年との交流でよい刺激を受けて活動を2回行うことでリーダーシップを発揮することが出来ていた。

キーワード：ボランティア活動、熊本地震、復興支援、学生ボランティア支援

\*福岡女学院看護大学 \*\*福岡女学院大学

## I. 緒言

阪神・淡路大震災以降、人々のボランティアに対する関心は高まり、平成25年の総務省統計局の結果で災害ボランティア活動を行った人の割合は、3.8%で平成18年の1.2%と比べると、2.6ポイント上昇している。なかでも在学者の行動者率を学校の種類別にみると、大学・大学院が最も高くなっ

ている。学生は、人の役に立ちたいという動機があってもボランティア活動はどこで何をを行い、計画を立案し調整していくのかなど方法についてはわからない。特に看護大学生は過密カリキュラムの中で時間もない。

佐々木（2003）の結果でも若者のボランティア活動参加の障害として時間的なコストが最も多く上がっていた。そのことから学生が災害ボランティ



ア活動が出来るように教員による学生ボランティア支援が必要である。

ボランティアにおける災害救援支援活動は、ボランティアと被災者のニーズをつなぐコーディネートの機能が求められる（本間，2014）。

菅（2011）は、必要な支援を組み立てていくことも災害ボランティアの重要な役割であると述べている。

最近相次ぐ災害に、多くの大学生が復興に向けたボランティア活動に関与しているのは、あらゆる報道で知られている。大学が被災地の復興に寄与することは、教育・研究機関として社会的責任を果たすだけでなく、大学の使命のひとつである社会貢献を果たすことにも繋がる。また学生の社会性・人間性を育む教育的見地としてもその効果は高いことから、ボランティア経験を単位として認めている大学もある。2012年から3年間続いた本学での「東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアー」でも教育的効果が報告されている（酒井ら，2016）。

2016年4月14日21時26分頃、熊本で震度7（M6.5）の地震が発生。のちにこれは「熊本地震」の前震と言われた。それから、わずか28時間後の16日1時25分頃、震度7（M7.3）の本震が発生した。その後も震度7クラスの揺れが連続して起き、余震は2000回を超えた前例のない災害となった。死者50人、災害関連死167人（2017年4月時点）、負傷者2408人、避難者は最大18万3882人（熊本県人口の約10%）、建物被害は17万822棟に及んだ。

我々は、2012年「東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアー」で看護学生を引率した経験から、学生でも被災地で出来ることが多くあること、また学生が被災地から学ぶ意義が高いことを痛感していた。しかしこの時は距離的な問題からシームレスな継続支援が叶わなかった。災害復興期に頻発する様々な健康問題には、息の長い活動が必要であることを感じていたことから、隣県にある看護大学だからこそ、出来ることは必ずあると確信し、学生引率の企画をした。

被災地支援に入るボランティアは、原則、自己完結型で、被災者への救援物資や義捐金に手をつ

けるわけにはいかない。つまり、自分達の衣食住の確保ができて初めて現地入り出来る。受け入れ団体や、活動資金の目途がついた2016年10月、ボランティア活動発案者が学長や学部長に、ボランティア募集要項（企画書）を持参し12月の第1次隊出発を相談した。「熊本応援したかつ隊」のネーミングの提案は、災害看護を担当する前学部長だった。

本報告では、2016年12月から2018年3月まで実施した熊本地震復興支援ボランティア活動（1次隊から5次隊）および学生ボランティア支援について振り返り評価を行い、今後の課題を見出すことを目的とする。

## II. 方法

### 1. 熊本応援したかつ隊概要

#### 1) ボランティア活動期間

2016年12月～2018年3月（1次隊～5次隊）

#### 2) 隊員構成

2016年度

12月 1次隊 A看護大学学生3名 教員2名

3月 2次隊 A看護大学学生4名 教員2名

2017年度

8月 3次隊 A看護大学学生4名 教員3名  
B大学学生2名（子ども発達学科）

12月 4次隊 A看護大学学生4名 教員3名  
B大学学生2名（子ども発達学科）

3月 5次隊 A看護大学学生4名 教員3名  
B大学学生2名（子ども発達学科）

### 2. ボランティア活動計画

#### 1) 活動前

ツアー前後を含めたスケジュール立案・役割分担・活動場所のリサーチ・事前課題の設定・活動内容の企画立案などを行う。

#### 2) 活動中（内容）

被災者の介護予防やリラクゼーション効果をもたらすような健康学習会、子どもらの発達や情緒安定を促すレクリエーション等を実施する。活動内容は、現地のニーズに応じて適宜、変更や改良を行っていく。活動中はNUCCS（学内ネットワー



ク)により、参加していない学生および教職員にも現地での様子をタイムリーに発信する。

### 3) 活動後

報告書作成・オープンキャンパス/チャペル/学園祭(11月の学園祭で、被災者住民作成の手芸用品を販売し、その収益を被災地に還元することを計画)/看護大ホームページ(以後、HPと略す)への活動報告などを行う。

## 3. 学生ボランティア支援

1) 活動回数：長期休暇を利用し1年間で3回を計画する。

### 2) 隊員

(1) 参加回数は、継続支援を目的に、学生一人当たり2回以上参加する。

(2) 所属・グループ学生配置は、看護学科と子ども発達学科の学生が協働して活動する。

3) 支援方法：活動前中後と一貫して、学生の自主的な運営を促す。

4. 分析方法：「熊本応援したかっ隊活動報告書第1報：2016年度」、「熊本応援したかっ隊活動報告書第2報：2017年度」を用いて、熊本地震復興支援ボランティア活動(1次隊から5次隊)および学生ボランティア支援について振り返る。

## 5. 倫理的配慮

ボランティア活動報告書および論文作成についてはキャンパス熊本、九州キリスト災害支援センターの施設長と学生より許可を得た。

## 用語の定義

活動：ボランティア活動前(準備)、活動中(内容)、活動後(報告)を示す。

学生ボランティア支援：教員が行う学生ボランティア活動を支援する内容、方法を示す。

## Ⅲ. 結果

ボランティア活動は、受け入れてくれる団体が

なければ、活動は始まらない。事前に教員が受け入れ団体の確保を行った。

## 1. 学生受け入れ団体

### 1) キャンパス熊本

2014年5月キャンパス熊本が発会し、山本智恵子氏が代表を務め、訪問看護師として勤務しながら活動を続けてきた。2016年4月14日熊本地震により自らも被災し避難生活を続けていたが、6月より被災地益城町の支援に入る。

益城町社会福祉協議会の「地域支え合いセンター(※)」事業の委託を受け、熊本地震による最も被害が大きかった県下最大の仮設団地「テクノ仮設団地516戸」の支援を行っている。※益城町社会福祉協議会は、2016年10月仮設団地の見守り機構「地域支え合いセンター」を設立し、NPO等と協働し、巡回訪問による見守り・相談・生活支援・地域交流の促進・介護予防などの総合的な支援体制に取り組んでいる(キャンパス熊本のHP「キャンパス熊本の歩み」より～一部改変)。

### 2) 九州キリスト災害支援センター

2016年4月に熊本並びに大分、九州全域に起きた大地震に対し、地域と教会を支援するために設立された。熊本地震において被災した教会をはじめ、支援を必要としている方々に対して、諸教会、諸団体と連携しながら長期にわたる支援を行っている。2017年の九州北部豪雨災害に対し、大分県日田市にベースを開設し、日田市・朝倉市・東峰村の被災地域の支援にも入っている(九州キリスト災害支援センターのHP「団体概要」より～一部改変)。

## 2. 1次隊から5次隊までの活動の特徴

1次隊から5次隊までの活動は、活動前・中・後と詳細に表で示す(表1～表5)。

1次隊では、11月に隊員の募集をして、面接を行い、決定後打ち合わせを実施した(表1-1)。初めての活動であり確保された受け入れ団体1つに学生3名と教員2名で開始した。宿泊場所は、キャンパス熊本(以後、キャンパスと略す)が借り入れしている1軒家であった。

表 1-1 1次隊の主な流れ：隊員募集

11月11日	2年生チャペル
11月17日	1年生チャペル
11月21日	募集締切
11月24日	2名面接
11月28日	3名面接
11月29日	1名面接
11月30日	参加者決定 → 通知

表 1-2 1次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
12月5日	初めての顔合わせ (自己紹介・ボランティアに参加した動機・今後の日程決め)
12月8日	災害看護についての講義(災害看護について配布資料とスライドによる講義)
12月12日	支援にあたっての情報の整理 ・熊本地震の概要 ・熊本地震による被災状況(被災者数・家屋の被災状況など) ・熊本県益城町について(地理・天候など) ・仮設団地について ・どのような方が仮設住宅で暮らしておられるのか(入居者人口ピラミッド・独居高齢者数・入居者の年齢分布・世帯人数など) ・これまで起きていた問題はどのようなものがあるか ・いま起きている問題はどのようなものがあるか
12月15日	第1次隊で行う活動を議論、おおまかに決定 収集した情報を踏まえ、自分たちがぜひ実施させていただきたい実施できそうな活動を各々発表。その中から ・集会所の飾りつけ ・毎日午前中に開かれている「お茶っこ」という集まりの手伝い ・仮設住宅で暮らす子どもとのレクリエーションと冬休みの宿題をみる ・キャンパス熊本の活動として行われている家庭訪問にご一緒するという4つを主な活動として行うことを決定した。
12月19日	・バス乗車時間の最終確認 候補がいづつかあったので、表を印刷し、みんなで話し合い
12月20日	・「木」の型作り これからの大事な飾り付けの要となる「木」の作成作業
12月21日	・バス往復乗券購入 当日の混雑を避けるために事前に購入。4枚切符、往復切符などを利用した ・「木」のラミネート 型は前日に作っていたため、ラミネート作業の完了を目標

表 1-3 1次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後	その他
12月25日	曇		高速バス移動(博多→益城IC)	
12月26日 (1日目)	晴	2年生：訪問巡回 2年生/1年生：お茶っこ	2年生：訪問巡回 2年生/1年生：飾りつけ キャンパス熊本代表の講話	キャンパス熊本スタッフさん講話
12月27日 (2日目)	雨 曇	2年生：事務所整理 2年生/1年生：お茶っこ	2年生：訪問巡回 2年生/1年生：子ども交流 「みんなの家」飾りつけ	
12月28日 (3日目)	曇	1年生：訪問巡回 2年生2名：お茶っこ	1年生：訪問巡回 2年生2名：子ども交流 高速バス移動(益城IC→博多)	

表 1-4 1次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
1月6日	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成
1月12日	学長へ活動後の報告 活動を通しての学びやこれからの抱負などを述べ、学長・学長補佐より動かしのお言葉をいただいた。
1月18日	1次隊の活動をどのようにして学内・学外に発信していくか、議論 学内：礼拝・活動記録にて 学外：大学HPにて 学内・学外：報告書 以上の方法に決定し、今後の日程や計画決めを行った。報告書作成作業
2月27日	PPTや発表原稿を作成(全体調整)
2月28日	2次隊への送付
4月7日	チャペル報告会準備
4月13日	チャペルにて報告会(対象：1年生) 兼 2017年度募集
4月19日	チャペルにて報告会(対象：2年生) 兼 2017年度募集
4月28日	チャペルにて報告会(対象：3年生)

活動内容は、キャンパスで集会所の飾りつけ、毎日午前中に開かれている「お茶っこ」という集まりに参加し、被災した時の話を聞かせてもらい、被災者の当時の気持ちを知ることが出来ていた。仮設住宅で暮らす子どもとのレクリエーションや

表 2-1 2次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
2月28日	1次隊からの引き継ぎ、初めての顔合わせ ・ボランティアの活動内容 ・益城町の現状 ・自己紹介 ・ボランティアに参加した動機 ・今後の日程決め
3月21日	支援にあたっての情報の整理 ・熊本地震の概要 ・熊本地震による現在の被災状況(被災者数・家屋の被災状況など) ・九ヶ丘について 以上について各自インターネットや過去の新聞記事で情報収集しまとめたものの共有を行った。 1. 第2次隊で行う活動を議論・決定 収集した情報を踏まえ、自分たちがぜひ実施させていただきたい実施できそうな活動を各々発表。その中から ・集会所の飾りつけ ・毎日午前中に開かれている「お茶っこ」の集まりの手伝い、レクリエーションの実施 ・仮設住宅で暮らす子どもとのレクリエーション ・キャンパス熊本の活動として行われている家庭訪問にご一緒する(巡回) ・九ヶ丘での活動(主に家屋の片付け) という5つを主な活動として行うことを決定した。 2. 活動に必要なものをリストアップ、買出し 3. バス乗車時間の最終確認 4. バス往復乗券購入
3月22日	レクリエーションのための準備 飾りつけのためのラミネート チラシ作成
3月28日	災害看護についての講義(災害看護について配布資料とスライドによる講義) 活動に向けて活動内容や必要物品などの最終確認

表 2-2 2次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
3月29日	晴	移動	買出し、食事の準備、今後の予定の確認
3月30日 (1日目)	晴	キャンパス 災 九ヶ丘 2年生：巡回 2年生/1年生：公園整備 2年生：家屋の整理	子どもとの遊び キャンパス熊本スタッフさん講話
3月31日 (2日目)	雨 曇	キャンパス 災 九ヶ丘 清掃 2年生：巡回 2年生2名：飾りつけ 1年生：家屋の整理	子どもとの遊び 家屋の整理
4月1日 (3日目)	晴	キャンパス 災 九ヶ丘 1年生：巡回 2年生2名：さくら祭り 2年生：家屋の整理	子どもとの遊び 家屋の整理

\*キャン(キャンパス熊本の略)、九ヶ丘(九州キリスト災害支援センターの略)

表 2-3 2次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
4月6日	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成
4月27日	報告書の内容確認 報告書作成作業
5月9日	報告書フィードバック、チャペル準備、3次隊送りなどスケジュール決め
5月23日	PPTフィードバック、3次隊への送り日時決定 (8月8日12:45~、302ゼミ室)
5月31日	チャペルにて報告会(対象：1年生)
6月8日	3次隊への送り
6月9日	チャペルにて報告会(対象：3年生)
7月6日	チャペルにて報告会(対象：2年生)



冬休みの宿題をみる、家庭訪問に同行し、住民との関係づくり、安否確認の方法を学ぶことが出来た。現地での日々の活動終了後に活動の振り返りを実施した(表1-3)。

2次隊では、学生受け入れ団体の一つ追加した。九州キリスト災害支援センター(以後、九キ災と略す)というキリストの愛の精神に基づき、被災された方々の傍らに立ち、物資の供給・人の支援・精神的支援を行っている。隊員も学生1名を追加し、合計4名となる。九キ災の宿泊場所は、教会であった。活動内容としては、キャンパスで新たに公園整備をしており、その手伝いを行った。九キ災では、家屋の整理を行った(表2-2)。

3次隊の活動前に2回目の隊員募集を行った(表3-1)。3次隊から子ども交流活動での遊びの充実を図るため隊員にB大学子ども発達学科の学生2名も参加して学生合計6名となる。看護学科と子ども発達学科の学生が協働して活動した。キャンパスの宿泊場所が仮設住宅の談話室へ変更となった。活動内容として、被災者の仮設住宅での暮らしが長期に渡ってきているため、住民の健康維持のために新たに健康測定会とミニ講和を2つの受け入れ団体で追加した。九キ災では、急遽、活動初日に杷木中学校避難所支援も行った(表3-3)。情報発信として、グーグルを利用した活動ブログ(A看護大学が所属する学院全体に公開可能)を作成し、教員学生を中心に運用している。

4次隊、5次隊は、活動内容も軌道にのり、2回以上参加する学生が始めて参加する学生を先導して、計画を立案し進めていた。

### 3. ボランティア活動前、活動中、活動後

#### 1) 活動前

まず、ツアー前後を含めたスケジュールを作成して、事前課題の設定・活動内容の企画立案を行った。活動開始1か月前位に教員が受け入れ団体へ事前訪問して、打ち合わせを行った。打ち合わせ内容は学生が計画した健康測定やミニ講和、子ども交流を伝えて、実施する場所の相談などを現地担当者で行った。現地のニーズに応じて活動内容

表3-1 3次隊の主な流れ：隊員募集

4月13・19日	1次隊報告会に合わせチャペルで募集
4月28日	募集締切
5月12日	1名面接
5月12日	4名面接
5月15日	4名面接
5月18日	参加者決定 → 通知

表3-2 3次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
6月8日	2次隊からの引き継ぎ、3次隊初顔合わせ ・ボランティアの活動内容 ・益城町の現状 ・自己紹介 ・ボランティアに参加した動機 ・今後の日程決め 各自、事前学習・事前準備
6月13日	事前学習内容決め、測定練習、活動内容の提案
7月3日	合同会議1回目(12:30~13:20テレビ会議) ・自己紹介 ・これまでの活動紹介(1次隊2次隊のPPTを上映) ・8月の活動内容提案 ・Googleサイトの説明 ・その他(写真撮影・7次隊7/8の確認)
7月8日	合同会議2回目(9:00~12:00天神サテライト) ・グループメンバー決め ・それぞれの活動内容を説明 ・役割分担と期限 ・今後の予定決め
7月19日	合同会議3回目(テレビ会議) ・7/15~18現地情報の伝達 ・8/4の合同会議について
8月4日	合同会議4回目(天神サテライト) ・女学院大と看護大、それぞれの進捗状況の確認 ・役割分担の再確認 ・所持品など諸注意

~昼休みや放課後に集合し事前学習・事前準備~  
●A看護大学  
7/10~12  
7/28~27  
8/1  
8/3

表3-3 3次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
8月8日	晴	移動	スケジュール確認、Google確認
8月7日(1日目)	晴	テクノ仮設住宅 お茶っこ(健康測定会、ミニ講和) 杷木中学校避難所支援(救護所・子ども支援)	子ども支援 Y氏(テクノ仮設 回地自治会長) の講話 キャン パ ス の ア レ ン ス
8月8日(2日目)	晴	お茶っこ(健康測定会、ミニ講和) 事務所待機	子ども支援
8月9日(3日目)	雷を伴う 豪雨の ち晴れ	2年生:巡回 3年生2名:お茶っこ 木山上辻仮設住宅 健康測定会、ミニ講和	子ども支援 Y氏(九州キリスト 災害支援センター 看護部)の講話

※キャン(キャンパス熊本)の略、九キ災(九州キリスト災害支援センター)の略

表3-4 3次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
8月中旬	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成 報告書作成作業
	報告書フィードバック、チャペル準備 4次隊送りなどスケジュール決め
	PPTフィードバック
9月28日	チャペルにて報告会(対象:1年生)
10月2日	チャペルにて報告会(対象:2年生)
11月11日	チャペルにて報告会(対象:3年生)
12月12日	チャペルにて報告会(対象:4年生)
11月4日	4次隊への送り
1月	報告書の内容確認

を適宜、変更や改良を行った(表1-2、表2-1、表3-2、表4-1、表5-1)。

表 4-1 4次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
11月4日	(10:00~15:00 天神サテライト) 3次隊からの引き継ぎ、4次隊初顔合わせ ・自己紹介(参加動機) ・活動紹介、現地の様子 ・益城町の現状 ・今後のスケジュール決め ・5次隊の活動内容とスケジュール決め 各自、事前学習・事前準備
11月20日	(13:00~13:20 第6回テレビ会議) ・自己紹介 ・事前学習、事前準備の内容決めと役割分担 ・今後のスケジュール決め ・メンバー決め
11月24~25日	・4次隊活動に向け、現地スタッフとの打ち合わせ ・現場視察とボランティア
11月29日	(13:00~13:20 第7回テレビ会議) ・自己紹介 ・現場視察の報告 ・次回、合同会議までに行うことの確認 ・活動中のスケジュール確認
12月17日	(10:00~12:00 天神サテライト) ・各自調べてきたことの発表 ・各大学で企画してきたことの発表 ・今後の予定を確認 ・その他(保険加入、誓約書記入、持参品と共同購入品の確認)
12月23日	(10:00~12:00 天神サテライト) ・各大学での準備状況の発表 ・役割分担の再確認 ・ミニ講話の練習

~昼休みや放課後に集合し事前学習・事前準備~  
 ●A看護大学  
 12/4  
 12/7  
 12/14  
 12/15  
 12/18  
 12/20

表 4-2 4次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
12月26日	晴	移動	スケジュール確認、ミニ講話の練習
12月27日(1日目)	晴	キャン(テクノ)仮設住宅 お茶っこ(健康測定会、ミニ講話) 広崎仮設 クリスタルホール演奏会	子ども支援 Y氏(テクノ)仮設団地自治会長)の講話
12月28日(2日目)	晴	キャン(テクノ)仮設住宅 健康相談会(健康測定会、ミニ講話) 広崎仮設 年末大掃除	子ども支援 広崎仮設 健康測定会、ミニ講話
12月29日(3日目)	晴	キャン(テクノ)仮設住宅 2年生:巡回 3年生1名、1年生1名:お茶っこ 津森仮設住宅 イモ煮会、健康測定会、ミニ講話	子ども支援 Y氏(九州キリスト 災害支援センター看護部)の講話 子ども支援

\*キャン(キャンパス熊本の略)、九キ災(九州キリスト災害支援センターの略)

表 4-3 4次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
1月	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成 報告書作成作業
1~3月	報告書フィードバック、チャペル準備、5次隊申請などスケジュール決め
4月10日	PPTフィードバック
2月26日	5次隊への申請
4月16日	チャペルにて報告会(対象:2年生)
4月20日	チャペルにて報告会(対象:3年生)
4月18日	チャペルにて報告会(対象:1年生)
運営	報告書の内容確認

## 2) 活動中(内容)

## (1) 健康測定会とミニ講和

3次隊から被災者の健康維持のために開始した健康測定会とミニ講和では、被災者の皆さんに健康維持の関心を持ってもらい、健康維持の重要性を理解してもらうことが出来た。学生は、現地到着初日の被災者とのコミュニケーションでは何を話せばよいかわからず、ぎこちなかったが、健康測定会やミニ講和などを通して徐々に話をすることが出来るようになった。4次隊や5次隊では、健康測定会とミニ講和で被災者の皆さんとも距離が近くなり、顔なじみになったことで被災者の方が再会を喜び、忘れないで欲しいなどの気持ちを伝えられた。

## (2) 子ども交流

看護学科と子ども発達学科の学生が協働したことで、看護学生は自分たちが考えつかないような遊びが追加されたことで専門の必要性を感じていた。子ども発達学科の学生は、看護学生の積極的な活動のみで、学内では見せることのなかった主体的な行動をとることが出来ていた。また、看護学生が楽しく活動をしていたことを共に行うことで子ども発達学科の学生も楽しく活動をしていた。

## (3) 活動中の情報発信

活動中はグーグルを利用した活動ブログ(学内ネットワーク)により、参加していない学生および教職員にも現地での様子をタイムリーに発信した。学内からの教員の応援メッセージは、隊員の活動の励みになった。

## (4) その他の活動

2次隊から開始した九キ災での活動を通して、学生はキリスト教の愛の精神について、祈りの時間を共に過ごすことで活動前後に気を静める意義や相手を思いやる配慮について感じていた。

## 3) 活動後

各隊次の活動終了後に報告書作成を行った。今回の隊員の中にはチャペルでの活動報告を聞き、学生であっても現地の人の力になることが出来るのだと強く感じて参加を志望した学生もいた。



表 5-1 5次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
2月28日	(10:00~15:00 天神サテライト) 4次隊からの引き継ぎ、5次隊初顔合わせ ・自己紹介(参加動機) ・活動紹介、現地の様子 ・益城町の現状 ・今後のスケジュール決め ・5次隊の活動内容とスケジュール決め 各自、事前学習・事前準備
3月7日	・事前学習、事前準備の内容決めと役割分担 ・今後のスケジュール決め ・メンバー決め
3月12日	・教材づくり、シナリオづくり ・現地スタッフと連絡、調整 ・ポスター掲示やチラシ配布依頼
3月18日	・教材づくり、シナリオづくり ・健康教育のデモンストレーション
3月23日	・事前学習と事前準備 ・健康教育のデモンストレーション
3月25日	(10:00~12:00 天神サテライト) ・各大学での準備状況の発表 ・役割分担の再確認 ・ミニ講話の練習 ・各自調べてきたことの発表 ・各大学で企画してきたことの発表 ・今後の予定を確認 ・その他(保険加入、誓約書記入、持参品と共同購入品の確認)

表 5-2 5次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
3月28日	晴	移動	スケジュール確認、ミニ講話の練習
3月29日 (1日目)	晴	キャン テクノ仮設住宅 子ども支援	子ども支援
		九 広崎仮設 健康測定会、ミニ講話	広崎仮設 子ども支援
3月30日 (2日目)	晴	キャン テクノ仮設住宅 清掃・花植え	子ども支援 Y氏 (キャンナス 熊本代表) の講話
		九 津森仮設 子ども支援	津森仮設 健康測定会、ミニ講話
3月31日 (3日目)	晴	キャン テクノ仮設住宅 1年生：巡回 3年生、2年生：子ども支援	健康測定会、ミニ講話 M氏 (九ヶ沢ディレク ター) の講話
		九 馬水仮設住宅 健康測定会、ミニ講話	広崎仮設 子ども支援

\*キャン(キャンナス熊本の略)、九ヶ沢(九州キリスト災害支援センターの略)

表 5-3 5次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
4月	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成 報告書作成作業
4~7月	報告書フィードバック、チャペル準備、6次隊申込みなど スケジュール決め PPTフィードバック
5月19日	6次隊への申込み
6月4日	チャペルにて報告会(対象：2年生)
6月11日	チャペルにて報告会(対象：3年生)
6月18日	チャペルにて報告会(対象：1年生)
	報告書の内容確認

表 6 学園祭(ナーシングフェスタ)

日付	内容
2017年9月~ 11月10日	販売する小物を現地から仕入れる、現地の作成者と打ち合わせ、 パネル作成、写真の入手、ブースの飾り付けなど
11月11日	ナーシングフェスタ当日 熊本ブースを設け、活動報告のPPTを流したり、パネルを展示し た。被災者が作成した小物を販売し、売上金は全額寄付した。

11月の学園祭では、熊本支援に参加したあるいは今後参加予定の学生らが企画・実施をして、被災者住民作成の手芸用品を販売し、その収益を被

災地に還元した(表6)。看護大HPへの活動報告などは、それぞれ担当者を決めて、情報の共有を行うために計画した内容を実行することが出来た(表1-4、表2-3、表3-4、表4-3、表5-3)。

#### 4. 学生ボランティア支援

隊員構成として学年が偏らず他学年との交流が出来るようにした。下級生は先輩学生の主体的な姿を見て、私も先輩のようになりたいという思いを抱いていた。活動前中後と一貫して学生の自主的な運営を促すことを心がけ、1次隊の頃は教員主体で行ったことを徐々に役割を学生へ委譲していった。ボランティア活動を2回終了した学生は次のグループへの申し送りの際に、活動前にやらなければならない内容を主体的に考え、計画を提案していた。次のグループへ状況を考えながら次のグループが決断出来るように進めていた。ボランティア活動2回目の学生は、1回目の学びを活かしてリーダーシップを図ることが出来ていた。

#### IV. 考察

##### 1. ボランティア活動前、活動中、活動後

###### 1) 活動前

1次隊の活動を開始することができたのは、事前に学生受け入れ団体であるキャンナス熊本の調査、交渉をしたボランティア活動発案者の働きによるものであり、受け入れ団体を調整するコーディネーターの役割を果たすことが出来ていた。

活動前準備として学生が計画した活動内容を事前に教員が現地に赴き、受け入れ団体担当者へ伝えて、現地のニーズを学生へ伝達したことは、コーディネーターのマッチングの役割を担っていた。現地のニーズに応じて活動内容を適宜、変更や改良を行ったことは、菅(2011)の災害ボランティアの支援に際して被災者・地域に合わせて支援方法や体制を柔軟に変えていく必要があるということに該当し、災害ボランティアの支援として適切であったと考えられる。そのことが今までボランティア活動を継続して行っていることにもつながっていると推察される。



## 2) 活動中 (内容)

### (1) 健康測定会とミニ講和

3次隊から開始した健康測定会やミニ講和で、学生がコミュニケーションをうまく行えなかったが、徐々に話をすることが出来るようになった。そのことは、人間性や対人スキルに関わるボランティアの特徴を体験し、学生の対人スキル向上につながっていたと考えられる。田中(2011)もアイデンティティ獲得にとって具体的な他者や社会集団との関係が重要であると述べている。

健康測定会とミニ講和で被災者の皆さんとも距離が近くなり、顔なじみになったことで被災者が再会を喜び、忘れないで欲しいなどの気持ちを伝えられたことより活動継続の必要性を再認識した。長期休暇を利用して2年間で5回活動を継続した意義があると考えられる。渥美(2013)も長期に亘る復興支援の活動に求められることは地域の文脈を踏まえて、じっくり取り組むこと、寄り添い続けることであると述べている。

### (2) 子ども交流

3次隊から隊員にB大学子ども発達学科の学生と教員が加わったことにより、子どもの遊び内容のバリエーションが増えた。また子供に合わせた関りなどの充実を図ることが出来たことで、子どもらの発達や情緒安定を促すことの一助になったと考えられる。看護学科と子ども発達学科の学生が協働したことによる効果については、看護学生の専門の必要性を感じていたことや子ども発達学科の学生が活動を楽しそうにしていた姿から異なる学科の協働によりお互いに刺激を受けており、妹尾(2008)のボランティア経験の効果による人間関係の広がりを持つことが出来た。学生たちは、積極的に変化していき、視野の広がりを持つことが出来たと考えられる。

### (3) 活動中の情報発信

グーグルを利用した活動ブログについては、学院全体に公開可能なブログであるが、今後さらに多数がフォローする仕掛けづくりが課題で

ある。

### 3) 活動後

活動後の報告について学外への活動の公開方法として、現在ホームページを利用しているが、多くの人が閲覧するような方法の検討も必要である。

今回の隊員の中には、チャペルでの活動報告を聞き、参加を志望した学生もいたことから活動報告の意義は大きいと考える。酒井ら(2013)も活動での学び、感じたことの報告は、多くの人に知ってもらえる機会となり、意義について述べている。

## 2. 学生ボランティア支援

学生の隊員構成としてボランティア活動で他学年との交流が出来るようにしたことで、下級生はモデルとなる先輩像を抱く機会となった。伊丹(2008)の研究の中でも学生たちの要望として他学年と交流することはよい刺激になるので機会を増やしてほしいと述べられており、学年を超えた交流の効果があったことが推察された。

2次隊よりボランティア活動を2回参加する学生もでてきたことから、教員主体で行った内容について徐々に役割を学生へ委譲していった。そのことで、学生は主体的に考え、行動をとることが出来ていった。主体的な行動は、箕浦、高橋(2012)の社会人基礎力に通じ、主体的に考えることは「前に踏み出す力」、計画力は「考え抜く力」、次のグループへ配慮し決断を任せるようにしたことは「チームで働く力」につながり、将来看護職となる学生にも求められる能力であり、重要であると考えられる。

## V. おわりに

今回、熊本地震復興支援ボランティア活動および学生ボランティア支援について振り返りを行うことで、活動の評価と今後の課題を見出すことが出来た。

活動前では、教員が学生ボランティアの受け入れ団体を調整すること、活動前準備として学生と現地のニーズのマッチングを行い、コーディネートの役割を果たすことが出来ていた。事前調整の

中で活動内容を被災者・地域に合わせて変更していき、災害ボランティアとして必要な支援を適切な方法で行うことが出来た。

活動中（内容）では、健康測定会とミニ講和を通して学生の対人スキル向上につながったと考えられる。子ども交流では、子ども発達学科の学生参加により、子どもの遊び内容が充実して、子ども支援につなげることが出来た。さらに、他学科学生との協働作業により、学生は視野と人間関係の広がりを持つことが出来た。活動中の情報発信としては、今後さらに多数がフォローする仕掛けづくりが課題である。

活動後では、報告書作成をはじめ、様々な場面での報告を行うことで多くの人に知ってもらう機会となった。

学生ボランティア支援では、学生は他学年との交流により、よい刺激を受けることが出来た。さらに、教員は活動前中後と一貫して学生の自主的な運営を促すことを心がけ、徐々に役割を学生へ委譲していった。学生は2回目のボランティア活動では主体的に考え、リーダーシップを発揮することが出来ていた。このような2016年から2年間に亘る活動の継続が、復興支援の活動に求められている寄り添い続けることにつながっていると考えられる。

今後は、情報発信方法や情報共有の課題などの検討が必要である。今後も被災者のニーズに合わせて、さらに活動を継続して熊本地震の復興支援を行っていくために現地団体と連携を図り、協力をしていきたいと考える。

## 謝辞

我々のボランティアを快く受け入れてくださった熊本県益城町社会福祉協議会委託団体のキャンパス熊本の山本代表およびスタッフ、九州キリスト災害支援センターのチーフディレクターの諸藤さんおよびスタッフの皆様、また福岡女学院看護大学から支えて下さった教職員の方々に心より感謝いたします。

本活動は、福岡女学院2017年度学院活性化推進助成金（代表：酒井康江）から助成を受けて活動

したものである。

## 文献

- 渥美公秀. (2013). 被災者支援について災害ボランティアから考える. 消防科学と情報, 112, 6-9.
- 伊丹君和. (2008). 未来看護塾の活動および人と関わる体験が看護学生へもたらす効果. 人間看護学研究, 6, 49-61.
- 箕浦とき子, 高橋恵. (2012). 看護職としての社会人基礎力の育て方—専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素—. 90-91, 日本看護協会出版会, 東京.
- 酒井康江, 松尾和枝, 奥野由美子他. (2013). 学外ボランティア事業の進め方～東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアーの実践報告（第一報）～. 福岡女学院看護大学紀要, 4, 35-41.
- 酒井康江, 丸山智子, 松尾和枝他. (2016). 学外ボランティア事業に参加した学生の学び 東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアーからの報告（第二報）. 福岡女学院看護大学紀要, 6, 11-17.
- 佐々木正道. (2003). 大学生とボランティアに関する実証的研究. 221-298, ミネルヴァ書房, 東京.
- 妹尾香織. (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16, 35-42.
- 総務省統計局. (2013). 災害ボランティア活動を行った人の状況. 2018-12-3. <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi671.html>.
- 菅磨志保. (2011). 日本における災害ボランティア活動の論理と活動展開—「ボランティア元年」から15年後の現状と課題—. 社会安全学研究, 創刊号, 55-66.
- 本間照雄. (2014). 災害ボランティア活動の展開と新たな課題. 社会学年報, 43, 49-64.
- 田中雅文. (2011). ボランティア活動とおとなの学び. 19, 学文社, 東京.

# 福岡女学院看護大学看護シミュレーション教育センターの 施設利用の実態と課題

The Current Situation and Issue of the Simulation Center for Nursing Education  
at Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

太田 里枝\*  
Rie Ohta

藤野 ユリ子\*  
Yuriko Fujino

キーワード：シミュレーションセンター、シミュレーション教育、利用状況

\*福岡女学院看護大学

## I. はじめに

福岡女学院看護大学にある看護シミュレーション教育センター（以下、センター）は、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告」（厚生労働省、2011）を背景に、当大学におけるシミュレーション教育の教育・研究に関する企画、運用・管理および研修の企画・実施等の活動を推進することを目的として2016年9月に開設された。2017年度4月より本格的な利用が始まり、各領域がシミュレーションを取り入れた教育を行うだけでなく、学外者を対象としたセミナーなどを定期的に開催している。

センターは看護学生が臨床現場では実践する機会の少ない技術を繰り返しトレーニングできるよう、看護シミュレーション教育に特化した施設であり、このような施設を持つ大学は少ない。

今回、センターの1年間の利用状況を調査し利用の傾向と課題を明らかにし、センター利用の促進を図るための検討を行ったのでここに報告する。

## II. センターの概要

### 1. センターの構造、設備および機器類、利用用途

#### 1) センターの構造（図1）

地上3階の2階・3階を占有し、延床面積は954㎡（共用部分、廊下、WC除く）である。3階に

はICU、4床室（一般病室）、周産期、在宅・公衆衛生シミュレーションルームおよびコントロールルーム2ヶ所、ディブリーフィングルーム（定員80名）、2階にはディブリーフィングルーム（定員150名）、TBL室（定員10名）4部屋、機材庫を有している。

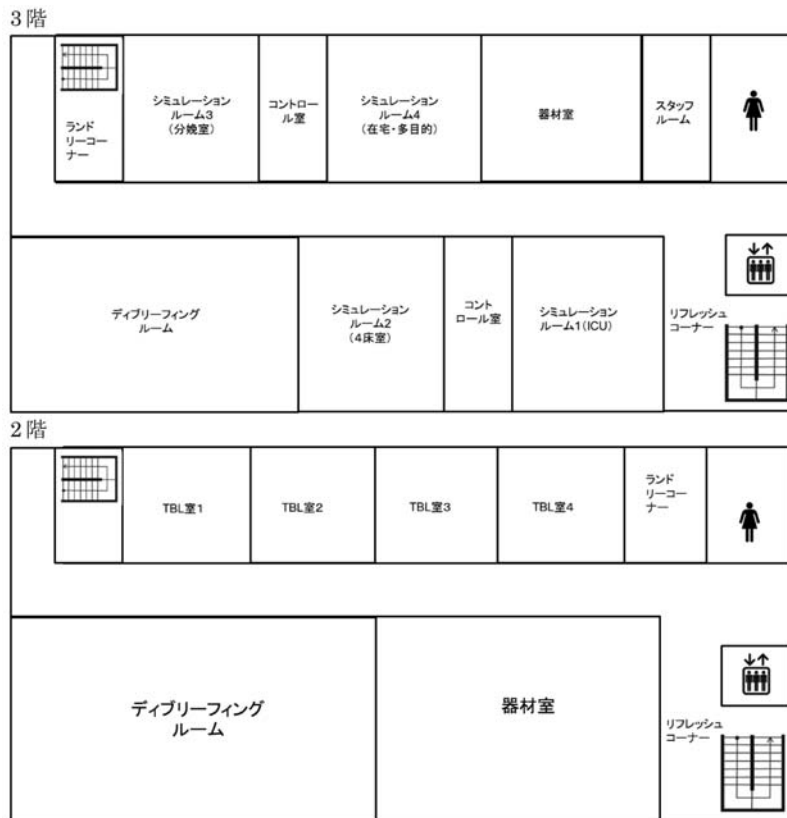
#### 2) 設備および機器類

ICUシミュレーションルームにはSimMan、ナースングアン、SimJuniorなどの高機能シミュレータのほか、模擬酸素、吸引、ナースコールなどを設置している。4床室シミュレーションルームにはベッド4台と模擬トイレ、洗面台、模擬酸素、吸引、ナースコールなどが完備されている。また、周産期シミュレーションルームには分娩・産褥期までの演習が行える母性総合シミュレータや新生児モデルなどを設置し、在宅・公衆衛生シミュレーションルームには実際の自宅を再現したロールスクリーンや介護用ベッドなどの設備を完備している。さらには、各部屋にマジックミラーやLIVE配信機器を設置し、シミュレーション場面を各ディブリーフィングルームへリアルタイムに配信し、大人数の学生が同時に視聴できるだけでなく、録画された映像を活用しての振り返り学習も可能となっている。

#### 3) 利用目的

センターは講義や演習だけでなく、学生の援助技術の自己学習や学生のシミュレーションサークル活動、対象や技術を限定としたシミュレーション

図 1 シミュレーション教育センター構造図



研修、地域連携事業の一環として行われている市民向け講座など様々な目的で利用されている。

## 2. 管理・運営体制

2017年4月よりセンター長と教員1名の2名が専任として配属されている以外に、各領域の教員6名と事務職員が兼任でセンターの管理・運営にあたっている。

センター利用は平日8:30~20:00までであるが、センター長が必要と認めた場合により、閉館日の利用もできるようになっている。利用手続きは学内関係者であればセンター運営委員会を通して予約・利用ができるが、学外者では、利用の目的がセンター利用規定に示す利用用途の範囲以内であれば申込書を記入のうえ、利用料金を納付することで利用可能である。

設備・機器・物品等の管理として、センターで利用する物品に関しては各領域間で共有利用ができるように、2号館器材庫に集約しリストを作成しており、管理は所有している領域が行っている。

またマジックやペーパータオルなどシミュレーション教育に利用する消耗品の準備や設備・機器のメンテナンスは、シミュレーション領域が一括して管理を行っている。

## Ⅲ. 方法

1. 期間：2017年4月~2018年3月
2. 方法：センター利用時に、調査表の内容について代表者に利用日時、場所、利用目的、科目名（講義以外では内容）、学年・人数などを記入してもらい、毎月集計を行った（図2）。
3. 分析方法：調査内容の単純集計と日数単位で施設の稼働率を算出した。

## Ⅳ. 結果

### 1. センターの1年間の利用状況

#### 1) 利用回数と利用時間

センターの1年間の利用回数は総計262回（平



図2 センター利用状況調査表

利用状況調査 3階シミュレーション室・ディブリーフィングルーム										
No	年月日(曜日)	時間	施設	教員名	利用内容	科目名/内容	学年	学生/参加者人数	教員人数	備考 (主に利用しな部屋)
1	( : ~ : )		基礎・成人・老年・小児・母性・精神・在宅・公衆衛生		講義・演習・外部研修・見学・準備/片付け・その他					シミュ(1・2・3・4)ディブ
2	( : ~ : )		基礎・成人・老年・小児・母性・精神・在宅・公衆衛生		講義・演習・外部研修・見学・準備/片付け・その他					シミュ(1・2・3・4)ディブ

利用状況調査 2階ディブリーフィングルーム										
No	年月日(曜日)	時間	施設	教員名	利用内容	科目名/内容	学年	学生/参加者人数	教員人数	備考
1	( : ~ : )		基礎・成人・老年・小児・母性・精神・在宅・公衆衛生		講義・演習・外部研修・見学・準備/片付け・その他					
2	( : ~ : )		基礎・成人・老年・小児・母性・精神・在宅・公衆衛生		講義・演習・外部研修・見学・準備/片付け・その他					

利用状況調査 TBL室(1・2・3・4)										
No	年月日(曜日)	時間	施設	教員名	利用内容	科目名/内容	学年	学生/参加者人数	教員人数	備考 (主に利用しな部屋)
1	( : ~ : )		基礎・成人・老年・小児・母性・精神・在宅・公衆衛生		講義・演習・外部研修・見学・準備/片付け・その他					TEL(1・2・3・4)
2	( : ~ : )		基礎・成人・老年・小児・母性・精神・在宅・公衆衛生		講義・演習・外部研修・見学・準備/片付け・その他					TEL(1・2・3・4)

図3 センター利用回数と利用時間

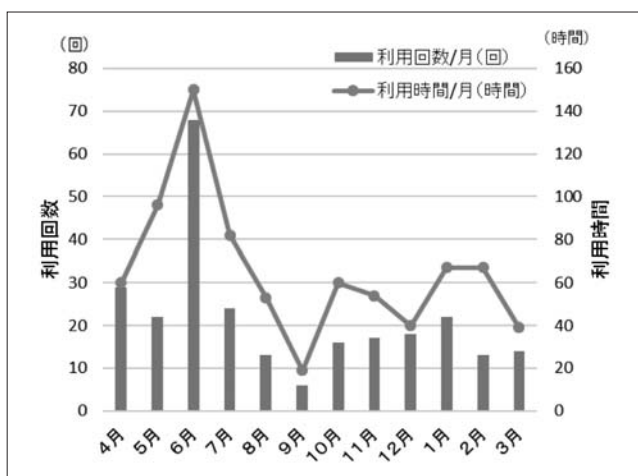


図4 センター場所別の利用回数

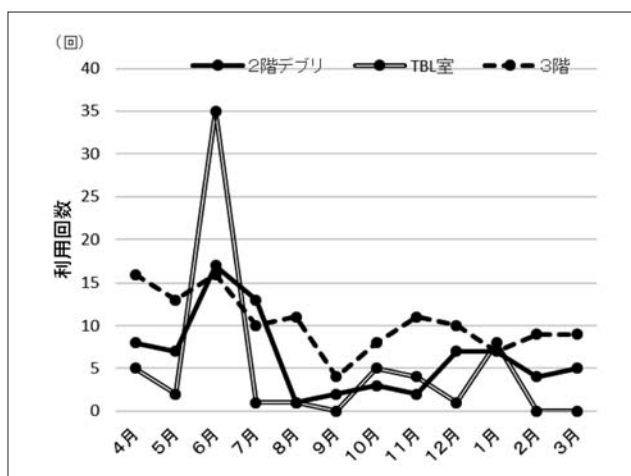


表1 月別センター利用の目的と回数

利用目的	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
講義	6	1	3	0	1	1	0	1	1	0	0	0	14
演習	11	14	54	7	1	2	6	8	11	8	2	1	125
実習	0	0	1	0	0	0	4	0	0	2	0	1	8
準備・片付け	6	4	8	9	3	2	1	0	2	4	3	2	44
研修会(外部)	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	6	1	11
時間外トレ	2	0	0	0	4	0	3	2	0	2	0	1	14
見学	2	0	2	1	0	0	2	2	2	0	0	4	15
αテスト	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3
その他	1	2	0	5	2	1	0	4	2	6	1	4	28
総計	29	22	68	24	13	6	16	17	18	22	13	14	262

均21.8回/月)、利用時間は787時間(平均65時間/月)であった。利用時期は回数、時間とも6月が最も多く、9月が最も少なかった(図3)。

2) 利用場所と利用目的

センターの利用場所(部屋)は3階シミュレーションルームが124回(平均10.3回/月)と最も多く、次いで2階ディブリーフィングルーム76回

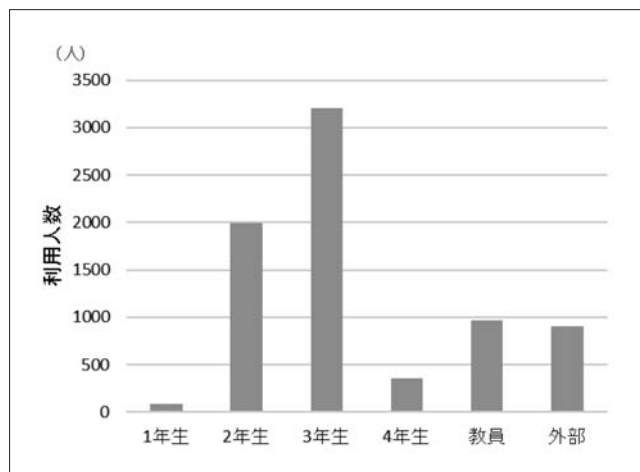
(平均6.3回/月)、2階TBL室は4部屋総計で62回(平均5.1回/月)利用されていた(図4)。また利用目的は演習が125回と最も多く、次いで準備・片付けが44回、その他(すこやか教室、サークル活動、勉強会など)28回、見学15回、講義と時間外トレーニング14回、外部研修会11回などであった(表1)。



### 3) 利用人数

利用した人数は1年間の総数は7,511人で、うち学生の利用は5,642人、教員は966人、学外者の利用人数は903人であった。学生の学年別利用人数は、3年生3,204人、2年生1,996人、4年生358人、1年生84人であった(図5)。

図5 利用者別人数



### 4) 学年別センター利用の回数と目的

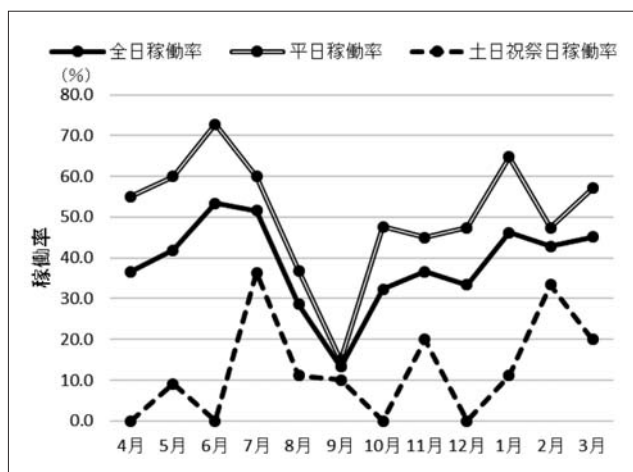
学生の学年別の利用回数は、2年生が84回、3年生67回、4年生14回、1年生3回であった。学年別のセンター利用の目的と回数は、利用の多かった2年生では演習が70回で最も多く、その他5回、時間外トレーニング4回などであった。次いで利用の多い3年生は演習が39回と最も多く、時間外トレーニングと実習が9回、講義6回などである。4年生は演習6回、講義と時間外トレーニングが2回などであり、利用が最も少なかった1年生は見学2回とその他であった。

### 5) センターの1年間の施設稼働率

1年間のうち、大学の閉館期間、年始、年末を除いた日数をセンター利用可能日数とし、利用日数をもとにセンターの施設稼働率を算出した(図6)。

2017年度のセンターの利用可能日は土日祝祭日を含め、大学が閉館となる期間を除いた353日であった。1年間の稼働率は平均38.5%であり、月間の稼働率が最も高かったのは6月で53.3%、最も少なかったのは9月で13.3%であった。

図6 センター稼働率



平日の1年間の利用可能日は238日であり、平日の稼働率は平均50.8%であった。平日の月間稼働率が最も高かったのは6月で72.7%、最も少なかったのは9月で15%であった。

土日祝祭日の1年間の利用可能日115日で、土日祝祭日の稼働率は平均13%、土日祝祭日の月間の稼働率が最も高かったのは7月で36.4%、次いで2月33.3%、11月20%であった。4月、6月、10月、12月の利用はなかった。なお、土日祝祭日の利用内容はすこやか教室7回、大学主催セミナー、学外者主催セミナーが3回、大学行事2回、技術研修(AHA認定BLSコース)2回であった。

## V. 考察

### 1. 学生のセンター利用の現状と課題

センターは年間を通して主に2年生と3年生が利用している。利用の多い4月~6月、10月~1月の平日のセンター稼働率は、4月~6月では50~70%以上、10月~1月では40~60%である。これは2年次、3年次に各領域の援助論や援助論演習など講義だけでなくシミュレーションやグループワークなどの演習や技術試験などが行われているためである。各科目の開講時期に変更がないことから、毎年この時期にセンターの利用頻度が増えることが予想される。また演習や技術試験の前には準備・片付けの時間も必要になっていることから、センターを利用する時間も増えると考え

る。さらに、4年生では8月と11月頃に、主に国家試験対策と総合看護演習で使用されている。総合看護演習では少人数で看護技術の学習やロールプレイを通した振り返りなどを、国家試験対策では事例を通した学習などを希望者に行っている。特に、国家試験対策の一環として行っているシミュレーション教育を活用した学習は、国家試験対策用の知識や判断力を養うというだけでなく、実践力の強化という側面もある。就職を控えた4年生のニーズは高く、希望者も増加傾向にあることから、今後、センターを利用しての国家試験対策用の学習の機会を増やしていくことも考えられる。

現在センターの利用に関しては、各領域のシミュレーション教育センター運営委員が、前期と後期の授業が始まる前に、利用日程を調査し、センターの利用時間が重ならないように調整をしており、予定されている日時以外に使用することは難しい。今後、講義・演習だけでなく、国家試験対策用学習のような自己学習での利用も見込まれる。このことから、センター利用に関して、領域間でのセンター利用時期の調整以外にも柔軟で簡易な予約方法の検討が必要であると考えられる。

また、1年生のセンター利用は見学とその他で3回であり、ほとんどの学生がセンターを利用していなかった。1年生の多くは入学の理由として、大学の施設設備の充実を挙げていたことから、センターを利用しての講義・演習に対する期待も大きいものと考えられた。そのため、2018年度から1年生へのシミュレーション演習が行われるようになった。このように低学年から講義や演習にセンターを活用する機会や環境を整えることで、2年生で行われるシミュレーション学習がスムーズに行えるだけでなく、自己学習などによる自主的な利用促進にも繋がるのではないかと考える。

利用目的別では講義・演習以外の時間を使用して行う、学生の自己学習の利用（時間外トレーニング等）は少ないのが現状であるが、これはセンター内の機器類を使用するには施設の利用許可を取るだけでなく、機器類の取り扱いが必要となるため、学生のみ利用が難しいものと考えられた。そこで2018年度より、シミュレーションサークル

に所属している学生から、各学年の代表者5名を選出し、機器類の使用法を指導している。このように教員がその場に立ち会うことなく、学生が個人学習を進められるような人員の育成や環境整備を行うことは、学生の自主性を涵養することにも繋がると思われる。

## 2. 学外者のセンター利用の現状と課題

学外者の利用人数は累計で903人であり、セミナーや研修会、会議、見学などの利用が多かった。シミュレーション教育センター運営委員会では各地で開催される学会の交流セッション等でシミュレーション教育に関する実践報告とともに、センターの広報活動にも力を入れている。また、見学も随時受け入れており、大学が主催するセミナーや研修等でセンターを利用した学外者も多いことから、これらが次のセンター利用に繋がるような対策を講じる必要もあると考えられる。センターの利用を学内者だけではなく、地域の方へ対象を拡大することは大学と実習施設など地域医療との連携を強化するだけではなく、教育の機会を生むことにもなり、大学のみならず、地域医療の質の向上にも繋がるのではないかと考える。

現在、学外者が利用する場合の手続きは、大学のホームページなどで行えるようになっており、学外者の利用がスムーズに行えるような工夫をしている。さらに、実際に利用する場合にもシミュレーション領域の教員やシミュレーション教育センター運営委員が機器類使用の支援や対応を行っている。今後、学外者の利用が増えれば、土日の利用も多くなると考えられる。土日のセンター利用には解錠・施錠や、機器類使用の補助としての人員要請があると考えられ、現在のように特定の学内教員が対応している状況は、負担が大きくなることも予想されるためマンパワーの確保や機器類使用のマニュアル作成などの検討も必要であると考えられる。

## 3. 利用頻度の少ない時期や部屋の利用推進

年間のセンター利用の頻度については、夏季休業期間である9月が最も低くかった。学生の個人

学習や学外者の利用を増やす以外にも、センターのメンテナンス時期に充てるなど9月のセンター利用方法を検討する必要がある。また、年間の部屋の利用頻度は2階のディブリーフィングルームやTBL室が少ない傾向にある。特にTBL室は4室の総計で62回であり、1室の利用頻度となるとさらに低くなる。TBL室の利用を促進していくには、心肺蘇生（CPR）・一次救命（BLS）の練習用の人形を設置し、学生に開放するなど少人数の学生が繰り返し練習を行えるような場に活用するなど具体的な利用方法の検討が必要である。

#### 4. センターの利用推進と教育活動支援

近年、看護教育の現場でもシミュレーション教育は注目されているが、シミュレーション教育を効果的に行うためには、指導する側にもシナリオ作成やファシリテーション、デブリーフィングの実践力など一定の教育力が必要である。大学でも国内外のシミュレーション教育のスペシャリストを招いて研修を定期的で開催しており、このような教員のシミュレーション教育力を維持・向上させるための研修を継続的に行っていく必要がある。また、学外者のニーズに応じた教育活動の支援を行うことでセンター利用の活性化にも繋がると考える。慢性的な人員不足の状態である医療、福祉の現場への有用な人材の確保と定着は課題の1つでもあり、取り組みを行っている施設も多い。人材育成支援にセンターを活用できるよう、地域のニーズを捉えた教育方法の開発や支援も必要である。そのためには、地域への広報のみならず、教育活動の企画運営を積極的に行うことも必要である。

#### 5. 今後の課題

今後のセンター利用時の利便性の向上や利用者の増加を図るために、以下のような課題がある。

- 1) 委員会による領域間での実施時期の調整以外にも柔軟で簡易な予約方法の検討が必要である。
- 2) 学生の自主的な利用促進を図るためにセンターを利用する機会や環境を整備する必要がある。

- 3) 施設や機器などを使用できる人材を育成する必要がある。
- 4) 学外者のセンター利用を促進するための広報活動や教育方法の開発など教育活動支援が必要である。
- 5) 利用頻度の少ない期間のセンター活用法について工夫が必要である。
- 6) 教員のシミュレーション教育力を維持・向上させるための研修を継続的に実施する必要がある。

#### VI. 結語

センターは開設して1年半が経過した。現在、本学にシミュレーション教育を定着させるために、教職員や学生を含め大学全体で取り組みを行っている。シミュレーション教育を更に進めて行くにはセンターの有効活用が不可欠である。今回明らかになった課題について取り組んでいくことで更なるシミュレーション教育の発展を目指したい。

#### 文献

- 阿部幸恵, (2013). 臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育, 医学書院, 東京.
- 厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討報告会」(2011-2-28)
- 藤野ユリ子, 山田小織, 椎葉美千代他 (2017). 福岡女学院看護大学看護シミュレーション教育センター開設1周年までの取り組み. 福岡女学院看護大学紀要, 8, 69-74.



# 福岡女学院看護大学チャペル礼拝統計総覧 (2008年度～2017年度)

Overview and statistics of chapel services of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University held in fiscal 2008-2017

貞野 宏之\*

Hiroyuki Sadano

キーワード：キリスト教教育、宗教教育、キリスト教学内礼拝、聖書、讃美歌

\*福岡女学院看護大学看護学部

## I. はじめに

多くのキリスト教主義教育を掲げる大学において、様々な形態で学内礼拝が実施されている。本学においても、チャペル礼拝が宗教教育の一端として行われてきた。各大学のホームページにはその学内礼拝が紹介されている。一部には同志社大学のように、日々行われている礼拝の抄録が掲載されているサイトもある（同志社大学キリスト教文化センター）。本学においては、学内向けホームページにて週ごとに実施予定が、また実施後には音声記録等が掲載され公開されている（福岡女学院看護大学NUCCS）。また、学外向けホームページでは前年度実施内容が一部公開されている（福岡女学院看護大学ホームページ）。

本研究の目的は、宗教教育の一環であるチャペル礼拝の学生教育における位置づけの確認と改善の取り組みに資する基盤資料の作成である。

## II. 研究方法

チャペル礼拝の全体像は、礼拝の事前周知のための週報、出席者、奨励者（発表者）、奨励内容等から構成されるが、今回は週報の内容に限定することとし、2008年4月8日の週より2018年1月まで発行された、10年間の全週報を対象とした。

### 【一次資料】

2008年4月8日発行の週報（No.1）から始ま

り、2009年度まではプリント版が保存されていた。2010年度版、及び2011年度前期は週報作成用のワードファイルが保存されていた。2011年度後期版はプリント版が保存されていた。プリント版、及びワードファイルは保存されていた宗教主事より借り受けることができた。2012年度～2017年度（～No.319）は週報WEB版が学内向けホームページ（NUCCS）からダウンロード可能であった。

現在はプリント版、及びワードファイルともに、今回の研究でデータ化したことにより、学内向けホームページ（NUCCS）から2008年度から2017年度まで閲覧することができる。

### 【二次資料化】

プリント版からはOCR操作、または手入力によってエクセルファイルにデータの移行を行った。ワードファイル、および、WEB版からは、ワードのテキスト処理機能を利用し、エクセルファイルへの移行を行った。エクセルファイルにおいては、データフィールドを実施日、対象学年、聖書箇所、讃美歌（番号）名、奨励者名、奏楽者名とした。2008年から2017年度まで総データ数は1360件であった。

次に、聖書箇所フィールドから、旧約、新約の2種の新フィールド、また、各聖書の書物名フィールドを作成した。また、奨励者名フィールドから、宗教主事、教職員、教職員OB、学生、学院関係者、牧師、他学外者に振り分けた種別フィールドを作成した。「宗教主事」は現任の宗教主事1人



である。「教職員」は礼拝開催時に現職の教職員、及び非常勤を含んでいる。「教職員OB」は看護大教職員のうち、礼拝開催時にOBとなったものである。「学生」は礼拝開催時に学生、「学院関係者」は看護大以外の福岡女学院に所属するもので、学院同窓会関係者を含んでいる。「牧師」は福岡女学院に所属しない牧師職、宣教師を含んでいる。「他学外者」は上記に該当しないものである。「讚美歌」は讚美歌21の該当番号と題名である。また、奏楽者名フィールドから、非常勤奏楽者、学生奏楽者、ヒンプレーヤーに振り分ける種別フィールドを作成した。学生担当奨励では1回ごとに担当者数をフィールド化した。また、各回の奨励内容を、実習体験、国内体験、国外体験、サークル等、その他に分けた種別フィールドを作成した。

以上のエクセルデータベースより奨励題（チャペルトーク）、学生名を除く奨励者名（スピーカー）は年度ごとに学外向けホームページにて公開している（福岡女学院看護大学ホームページ）。

【分析方法】

1. 聖書箇所ランキング：聖書の旧約新約でフィルタリング後、書物名フィールドでソート、年度ごとに数値化した。礼拝一回に複数の聖書書物を使用された場合は重複してカウントした。旧約は8位以下、新約は11位以下を省略した。
2. 奨励担当者推移：奨励担当者種別でフィルタリング後、年度ごとに数値化した。これをもとにグラフ化した。教員が主導し、学生が参加した奨励の場合は教員担当とした。
3. 奏楽担当者推移：奏楽担当者種別でフィルタリング後、年度ごとに数値化した。これをもとにグラフ化した。
4. 讚美歌ランキング：讚美歌でフィルタリング後、年度ごとに数値化した。
5. 学生担当者数推移：学生種別でフィルタリング後、一回ごとの担当者数から、年度ごとの総件数、学生総数、一回ごとの平均学生数に数値化した。これをもとに年度別にグラフ化した。
6. 学生担当奨励推移：学生種別でフィルタリン

グ後、奨励内容別に年度ごとに数値化した。これをもとにグラフ化した。

III. 結果

聖書箇所ランキング（表1）では、旧約296回に対して新約1067回であった。頻回引用書物は新約聖書の3福音書（マタイ、ルカ、ヨハネ）である。

表1 聖書箇所ランキング

		書名	回数
旧約 296	1位	イザヤ書	68
	2位	詩編	63
	3位	コヘレトの言葉	49
	4位	創世記	33
	5位	箴言	26
	6位	エレミヤ書	24
	7位	出エジプト記	10
新約 1067	1位	マタイによる福音書	290
	2位	ルカによる福音書	170
	3位	ヨハネによる福音書	98
	4位	コリントの信徒への手紙1	83
	5位	マルコによる福音書	69
	6位	ローマの信徒への手紙	67
	7位	フィリピの信徒への手紙	44
	8位	コリントの信徒への手紙2	42
	9位	ヘブライ人への手紙	37
	10位	ヨハネの手紙1	35

その他の集計結果は、表2に年度ごとの件数、割合で示した。各グラフでは割合を%表示とした。まず、奨励担当者推移（図1）では定常的に教職員が30%前後、看護大宗教主事が20~30%で推移している。2010年度からは教職員が主導し、学生が参加する奨励がみられた（表2-1）。2012年度からは初代学長を始めとした教職員OBが数%程度担当した。学院関係者は2011年度までは10~20%であったが、以後は、10%程度に落ち着いている。近隣の牧師は10%程度で、学外者は2009~2010年度は10%に迫ったが、以後は5%以下である。学生は2011年度までは5%以下であったが、以後は10~20%以上を占めるようになった。

図 1 奨励担当者推移

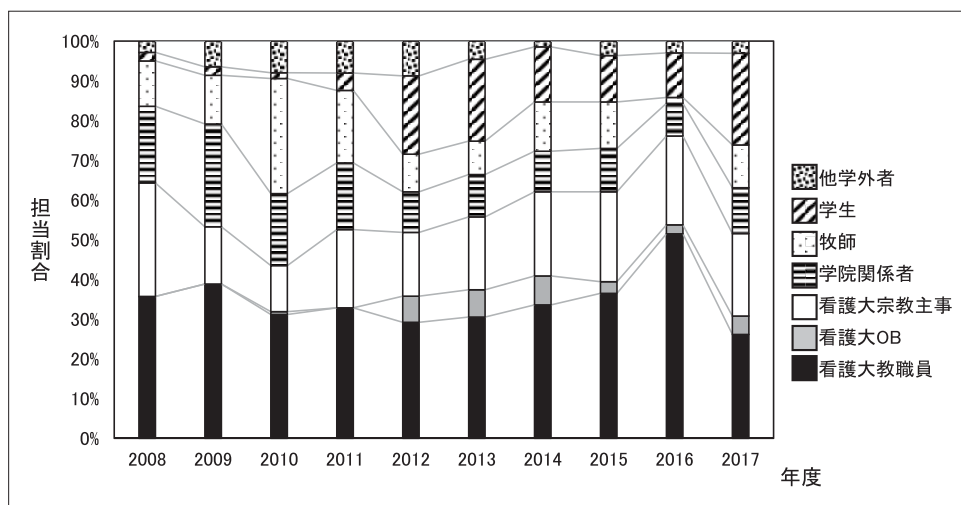


表 2 年度別チャペル礼拝集約表

表 2-1

年度		件数										割合										
		2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
担当者別	看護大教職員	50	54	43(1)	45(1)	40(1)	40(4)	46(1)	50(1)	69(3)	34(1)	471	0.36	0.39	0.31	0.33	0.29	0.31	0.34	0.36	0.51	0.26
	看護大OB	0	0	1	0	9	9	10	4	3	6	42	0	0	0.01	0	0.07	0.07	0.07	0.03	0.02	0.05
	看護大宗教主事	40	20	16	27	22	24	29	31	30	27	266	0.29	0.14	0.12	0.2	0.16	0.18	0.21	0.23	0.22	0.21
	学院関係者	27	36	25	23	14	14	14	15	11	15	194	0.19	0.26	0.18	0.17	0.1	0.11	0.1	0.11	0.08	0.12
	牧師	16	17	40	25	13	11	17	16	2	14	171	0.11	0.12	0.29	0.18	0.09	0.08	0.12	0.12	0.01	0.11
	学生	3	3	2	6	27	27	19	16	15	30	148	0.02	0.02	0.01	0.04	0.2	0.21	0.14	0.12	0.11	0.23
	他学外者	4	9	11	11	12	6	2	5	4	4	68	0.03	0.06	0.08	0.08	0.09	0.05	0.01	0.04	0.03	0.03
	計	140	139	138	137	137	131	137	137	134	130	1360	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
奏楽者	非常勤奏楽者	110	88	94	88	90	89	119	137	81	96	992	0.79	0.63	0.68	0.64	0.66	0.68	0.87	1	0.6	0.74
	学生	26	51	42	49	45	41	18	0	0	272	0.19	0.37	0.3	0.36	0.33	0.31	0.13	0	0	0	
	教員	2	0	2	0	0	0	0	0	0	4	0.01	0	0.01	0	0	0	0	0	0	0	
	ヒンプレーヤー	2	0	0	0	2	1	0	0	53	34	92	0.01	0	0	0	0.01	0.01	0	0	0.4	0.26
	計	140	139	138	137	137	131	137	137	134	130	1360	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表 2-2

年度		件数										割合											
		2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	
学生担当 回内訳	実習体験	0	0	0	1	12	7	1	7	4	8	40	0	0	0	0.14	0.43	0.23	0.05	0.41	0.22	0.26	
	国内体験	1	3	1	5	10	11	8	7	7	13	66	0.33	1	0.33	0.71	0.36	0.35	0.4	0.41	0.39	0.42	
	国外体験	2	0	1	0	1	7	5	0	2	4	22	0.67	0	0.33	0	0.04	0.23	0.25	0	0.11	0.13	
	サークル等	0	0	1	1	5	5	6	2	4	4	28	0	0	0.33	0.14	0.18	0.16	0.3	0.12	0.22	0.13	
	その他	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	5	0	0	0	0	0	0.03	0	0.06	0.06	0.06	
	計a	3	3	3	7	28	31	20	17	18	31	161	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
学生担当 回	担当人数																						
	年度別学生数b	6	4	7	13	61	44	45	32	39	94	345											
	平均学生数c	2	1.33	2.33	1.86	2.18	1.42	2.25	1.88	2.17	3.03	2.14											

表 2-1 担当者別の件数は一回に複数の担当者の場合においても 1 件とした。看護大教職員の件数中の ( ) は担当者が教職員が主導し学生が参加した奨励件数を示す。

表 2-2 件数は学生が含まれた奨励件数を示す。平均学生数 c は年度別学生数 b / 計 a の値を示す。

奏楽担当者推移 (図 2) では、非常勤奏楽者が常時 60% 以上を占めている。2013 年度までは 20~30% を学生が担当したが、2015 年度以降は 0% となった。代わるように 2016 年度からヒンプレーヤーが 30~40% の割合で使用されるようになった。

讃美歌ランキング (表 3) では讃美歌 21 から 173 曲が讃美され、そのうち上位 20 位を示している。1 位は一般にも知られている曲である。2~3 位、7 位には学生生徒に親しみやすく、歌いやすい曲が入っている。4~6 位は式典でも讃美される定

図2 奏楽担当者推移

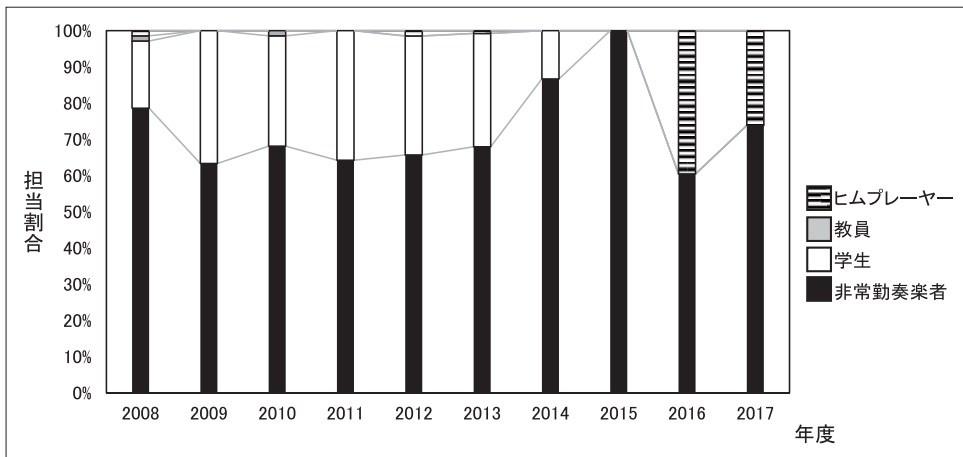
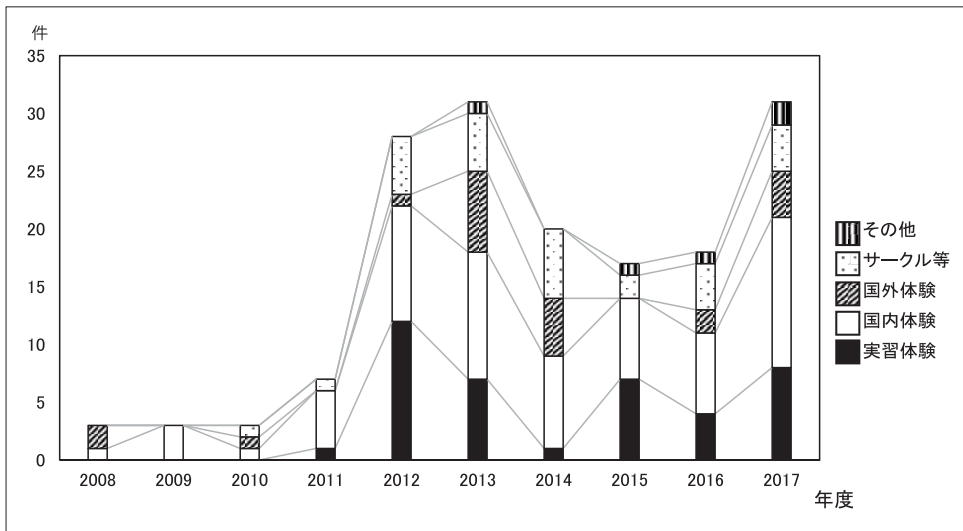


表3 賛美歌ランキング

順位	回数	曲番	題名	順位	回数	曲番	題名
1	64	493	いつくしみ深い	10	23	280	まぶねのなかに
2	63	575	球根の中には	10	23	403	聞けよ、愛と真理の
3	46	470	やさしい目が	10	23	371	この子どもたちが
4	44	520	真実に、清く生きたい	10	23	533	どんなときでも
5	40	412	昔主イエスの	10	23	484	主、われを愛す
6	39	57	ガリラヤの風かおる丘で	10	23	451	くすしみ恵み
7	29	425	こすずめも、くじらも	16	22	563	ここにわたしはいます
8	28	463	わが行くみち	17	21	505	あゆませてください
9	25	263	あら野のはてに	17	21	258	いそぎ来たれ、主にある民
				17	21	566	むくいを望まで
				20	20	290	おどりて姿で

図3 学生担当奨励種別



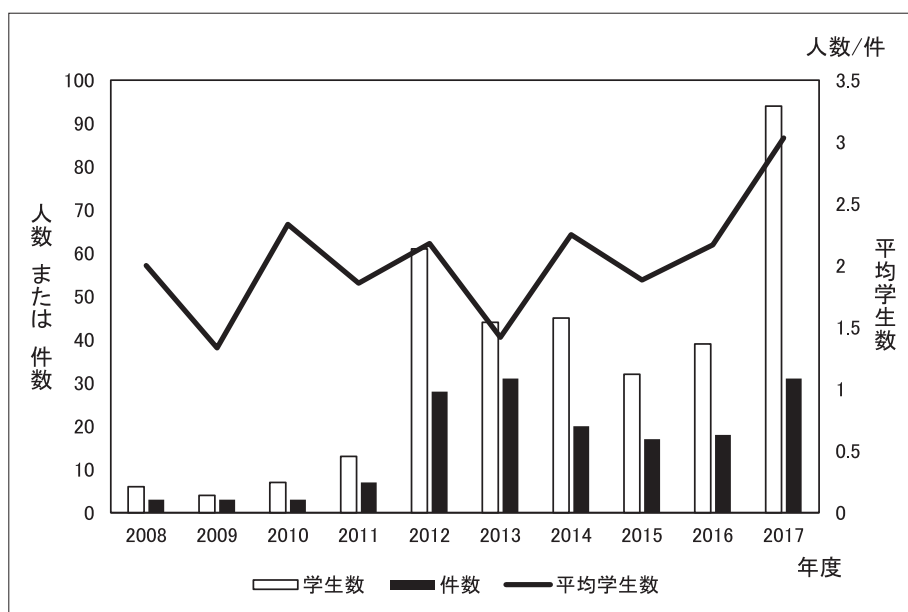
番の曲である。9位はクリスマスシーズンに讃美される曲である。

学生担当者の奨励内容推移(図3)では、2011年までは国内研修、ボランティア体験などの国内体験が主だったが、以降は、2014年を除いて実習

体験が増加した。サークルの活動紹介、国外体験などもテーマとなった。

学生担当者数の内訳(表2-2、図4)では、2011年度以降、件数と学生数が増えたが、一回当たりの共同担当者数は3人程度となっている。

図 4 学生担当数推移



#### IV. 考察

##### 【聖書】

聖書のページ数としては旧約1502ページ、新約480ページで、新約聖書は旧約聖書の1/3である。今回の引用回数としては新約が旧約の3.6倍となった。聖書箇所を選定は、ほとんどの場合宗教主事が行ってきたが、奨励担当者も学生も新約聖書により親しんでいることによるとみられる。新約聖書の中の福音書は、イエスの・キリストの直接的福音メッセージを語るという性格を持つ書物ということから、キリスト教の神髄ということもでき、一般的にも知られたエピソードが多い。本学1年次のキリスト教の講義においても解説されるため、チャペル礼拝での奨励の背景が理解されやすいということもある。

旧約聖書のイザヤ書、詩篇、コヘレトの言葉では、文章や詩の内容そのものが一般的ではないので、宗教主事や牧師によって取りあげられている。

##### 【担当者】

担当者の構成は看護大教職員、宗教主事、学生、学院関係者が8割以上を占め、学外からの牧師等は10%程度である。10年間を通して、宗教主事と教職員が6割を占め、宗教主事が週1回以上、教職員が週2回以上担当したことになる。宗教主事

が、開学以来宗教部委員の教職員はじめ教職員に奨励のおすすを不断に行ってきた結果であるとみられる。ちなみに、2016年は前副学長の任期中は他の年度よりも教職員担当割合が10%上昇した。2012年以降は学生の担当回が20%程度増え、本学の学内礼拝の特徴となっている。公開されたホームページによると、多くの大学で聖職者、キリスト者教員を中心に奨励がなされているとみられる。一方で学生の参加を方針としてホームページで公表している大学もある。一例として、広島女学院では週1回のチャペルを教職員と学生が交互に担当し（広島女学院大学ホームページ）、長崎ウエスレヤン大学は学生の担当割合は不明であるが、チャペルでの学生活動報告などが行われている（長崎ウエスレヤン大学ホームページ）。こういった学生参加のチャペルの教育的な意義に関して、キリスト教主義大学の学内礼拝を調査した比較研究は今後に待たれる。

##### 【奏楽者】

キリスト教の礼拝において、奏楽は不可欠な要素である。入場時、前奏、讃美歌、後奏時に主としてオルガンが演奏される。同法人の曰佐キャンパスの礼拝では専任の奏楽者が担当するが、看護大学では非常勤奏楽者が60%以上担当している状況である。開学時から2014年度まで20-30%程度



を学生が奏楽を担当していたことは特徴的である。学生が担当することで親しみやすく、学内共働で礼拝を形作るというスピリット形成の意味があった。一方で演奏技術が礼拝レベルに達しない場合もあり、礼拝の完成度の面では問題があった場合も見られた。

2015年度からは、学生奏楽者は立候補がなく実現していない。一方で、2016年度からはヒムプレーヤーによる奏楽が30-40%になった。ヒムプレーヤーは讚美歌21の伴奏曲を収録した電子プレーヤーで讚美歌番号をキー入力することで楽曲を出力することができる。奏楽者は参列者と合い協調しながら演奏することができるのに対して、ヒムプレーヤーは機械的な進行となるので、参列者がヒムプレーヤーに合わせて歌うことに慣れざる負えない状態となっている。現在では、学生はカラオケ演奏に慣れており、違和感は少ないと考えられる。

曰佐キャンパスの礼拝では、専任の奏楽者がパイプオルガンを演奏している。同法人内でも看護大の状況は特殊性があるとみられる。本学の奏楽の状況は今後も分析検討がなされ、曰佐キャンパスと比較し改善するべき部分を見定めるべきものである。また、他学とも比較研究することにより大学礼拝の奏楽の意義を深めることができるとみられる。

#### 【讚美歌】

本学の讚美歌は讚美歌21という、キリスト教主義学園で広く使用されるものである。選曲は概ね宗教主事が担当している。1位の「いつくしみ深い」は、一般社会でもよく知られている讚美歌の1つであり、外来者が来られる入学式、卒業式でもよく歌われ、本学では入学後の1年生の初期の礼拝で歌われる。また、学生の出身学校がキリスト教主義学園の場合、既に親しみ歌われていた曲も多いとみられる。「球根の中には」「やさしい目が」「こすずめもくじらも」「どんなときでも」がこれに相当する。讚美歌は歌い親しむことにより、礼拝外でも口ずさみ歌われるものである。これに加えて、讚美歌は宣教のためにも、さらには信仰の表現でもある。多くの讚美歌が繰り返し歌われることで、キリスト教のメッセージの浸透が図れ、

宗教教育の実りにつながると考えられる。

#### 【学生奨励担当】

2010年度まで学生が担当する回数が5件以下だったものが、2011年度には2倍になり、2012-2013年度には30件程度まで増えた。その後も例年20件程度以上で推移している。奨励の内容は実習体験、国内の研修やボランティア体験が多い。実習体験は実習指導教員がチャペルでの発表を勧奨し、教員とともに奨励にあたることで促進された。特に、実習未経験の下級生への奨励では真剣に耳を傾ける学生の姿があった。国内研修では宗教部主催のスタディツアー、また各種ボランティア体験の発表がなされた。これらは未経験の学生にとっては体験を共有化すると同時に、奨励担当学生にとっては体験の振り返り、内面の成長につながることが期待されている。

国外体験は、個人旅行の発表から始まり、2017年度には大学主催のオーストラリア看護研修の体験発表がなされた。礼拝で体験者の発表を聞いた学生には多様な文化を知るとともに、自らの参加への動機づけができていとみられる。学生の奨励準備には、宗教主事が担当した。学生が希望する発表内容を聞き取り、聖書の選定、学生の発表指導までを行っており、その過程は礼拝に根差した宗教教育を個別に具現化している事に等しい。奨励の終わりには祈り、または黙とうを学生が選んでいるが、自ら祈祷する学生も現れるようになり効果が上がっているとみられる。今後の研究では、奨励を担当した学生の感想などを聞き取り、分析することで、チャペル礼拝への学生のかかわり方と教育効果を考察することができると考えられる。

## V. おわりに

開学10年を期して、開学当初から不断に続けてきたチャペル礼拝の総覧を試みた。学内向けホームページでは、全週報を閲覧することができ、今回のデータベース作成、分析の一端が実現した。今後は、他学の調査も含め、更なるデータの収集分析によって、宗教教育の充実と発展につながるものと祈念する。

週報データの利用を快く認めていただいた、福岡女学院看護大学金田俊朗宗教主事、宗教部委員会に深謝します。

---

#### 文献

同志社大学キリスト教文化センター. チャペルアワー. 2018-08-19. <http://www.christian-center.jp/chapelhour/index.html>

福岡女学院看護大学NUCCS. 宗教部. 2018-08-17. [http://nxc.jp/fukujons/?page\\_id=819](http://nxc.jp/fukujons/?page_id=819)

福岡女学院看護大学ホームページ. チャペル礼拝. 2018-08-19. <http://www.fukujo.ac.jp/ns/chapel>

広島女学院大学ホームページ. 宗教センター. 2018-08-19. <https://www.hju.ac.jp/life/support/religion.php>

長崎ウエスレヤン大学ホームページ. ピースチャペル. 2018-08-19. <http://www.wesleyan.ac.jp/institution/chapel/>